

## 私論 北一輝

井上 裕

## 目 次

I. 「文学」に登場する北一輝	2
II. 「詩人」としての北一輝	18
III. 「イデオログ」としての北一輝	26
IV. 「魔王」ないし「呪的存在」としての北一輝	38
編集後記	50

「なぜ、北一輝なのか」を、まず言わなければならない。

私が北一輝に初めて出会ったのは、まだ20歳代、大学の専門課程でのゼミナールの研究主題を模索の時期であった。自らの若干の逡巡と違和感を経て、結局、卒業論文の主題を『日本ファシズム論』とした。「金融制度史」を基調的なテーマとする所属ゼミナールでの、私のこの「無謀な」研究主題設定の幼稚な根拠は、「ファシズムとは資本主義の異常な危機段階における金融資本のテロ独裁である」という30～40年代当時のコミンテルン（共産主義第3インターナショナル Third International. 世界各国の共産党の国際組織。19年レーニン等の指導下にモスクワで創立、43年解散）の幹部パーム・ダットの規定に依存していた。このテーマ設定の際の指導教授・加藤俊彦先生の柔らかな苦笑を今も冷汗とともに想起する（加藤先生は77年4月～87年3月の間、本学商学部また社会科学研究所にも在籍され、05年11月89歳で逝去された）。この私の卒業論文現物はもう散逸して手許にない。また、論文の内容自体について語ることも今はあまりない。だがこの若き折、「北一輝」に出会った。論文作成のために収集した資料の一つに彼の『支那革命外史』

があった。これも今では手許から喪失した書物だが、おそらく昭和6年3月、平凡社発行の『世界興亡史論』全17巻のうちの第9回配本と記憶する。その『外史』の一節の表現が当時の私を衝撃した。

それは、「歴史とは、斯かる魂より滴り落つる血の連続であるのか<sup>(1)</sup>」という表現である。古今東西を問わず、記されたすべての「歴史」は「血」＝殺戮ないし迫害によって彩られる。また、そのような「血」の連続によって「歴史」の実体は形成されている。それが、北の基本認識であろう。以降、やや誇張的かもしれないが、「北一輝ないし北一輝的なもの」への私の関心はいわば内的な実在として今日に至った。この青春期から長く持続されてきた一種の「宿痾」としての北一輝への関心、また上述の加藤先生へのひとつの鎮魂の想いの契機としての北一輝への関心、それがこの小論執筆の基底にある。

そしてまた、本論でも述べるような近年における北一輝関係研究の書物・論文の多出がある。北は、わが国近代の革命的な思想家ないし行動家のなかでも、やや異色独自の重量感を有する人物である。「改革」「改造」「革新」などの言「葉」が、まさに「葉」のように舞い飛び・交錯する現在であるからこそ、北一輝とは再認識されるべき存在ではないか。これも小論の問題意識の深部を形成する。以下、多くの既存論考とはなるべく異なる視点を意図して、次のような「私にとっての」北一輝論を試みる。

## I. 「文学」に登場する北一輝

北一輝は今日に至るまでその存在感をなお鮮明に維持しているが、単に伝記や評論の領域にとどまらず、彼は文学の世界でも多く登場している。これは、かなり特徴的なことであろう。同じ時代の類似の（広く「右翼」と括られる意味での）思想家ないし行動者～たとえば大川周明、橋孝三郎、権藤成郷、井上日召などが文学作品の上で登場することは稀れである。それぞれの「文学」の中で描かれた北一輝像についてはこれから述べるが、北がかくも多くの作品での登場人物であることそれ自体が、彼の特異性を示すといえよう。

たしかに、一つには2.26事件というわが国現代史の上でのクリティカルな事件での彼の重要な存在・役割が、作家たちの創作意欲を刺激した。だが、それだけではない。北一輝という希有の人格、明治以降の日本の歴史のなかでの独自の存在として発するその異様な魅力、思想と行動の両面にわたってのその美しい「危険性」、右であれ左であれその永遠の“革命の人的シンボル”のイメージ……。まさに彼は多くの文学者たちにとっての、いわば誘蛾灯的な素材である。だが、灯りに誘われて群がる多くの蛾の中には炎によって傷つくもの、あるいは瀕死の状況に陥るものもあった。この点にも関連し、もうひとつ『支那革命外史』の序文の中での“危

陰で美しい”彼の文章の一節をあげておく。

すなわち、「革命は維新の日本を赤化した。然らば支那が自ら燃ゆる時其の火の赤きに何の愕くことがある<sup>(2)</sup>」。

私の手許にあり、以下に順次とりあげる主要な「文学」作品をあらかじめ示しておく。

- ・武田泰淳『風媒花』新潮文庫、63/7.30、8刷。初出は52/1～11月号『群像』連載
- ・利根川裕『宴』中公文庫、80/2.10、1刷。初出は65/7～10月号『展望』連載
- ・三島由紀夫『英霊の声』河出書房新社、70/8.10、6版。初版は66/6.30

(2.26事件に関連する「英霊の声」「憂国」「十日の菊」の3作品を収録。とくに「英霊の声」)

- ・三島由紀夫『豊穰の海 第2巻 奔馬』新潮社、69/2.25、初版。
- ・久世光彦『陛下』新潮社、96/1.30、初版。
- ・手塚治虫『一輝まんだら 上・下巻』角川書店、90/12.20、初版。

(これは劇画であるが、北一輝をかなりシリアスに捉えており、あえて「文学」としてとりあげた)

また、付随的なものとして

- ・山田正紀『マジック・オペラー-2.26殺人事件-』早川書房、05/11.30、初版
- ・山中峯太郎『大東の鉄人』講談社・少年倶楽部文庫、76/9.16、初版。初出は32/8～33/12月号『少年倶楽部』連載

まず、『風媒花』における北一輝について述べる。

以下にあげる作品にも共通して、ここではこの小説のストーリー自体を語る余裕は、あまりない。だが、毛沢東主導の中華人民共和国成立は1949年のことである。1952年から『群像』に連載された『風媒花』はこの新中国をめぐる日本の思想家、知識人、政治家たちの心情と認識と関与が複雑に交錯する混沌たる物語であって、作者の武田泰淳自身や、その盟友(?)でもある竹内好をモデルとする人物なども主要な存在として登場する。

文庫版の解説者である三島由紀夫によれば、「『風媒花』の女主人公は中国なのであり、この女主人公だけが憧憬と渴望と怨嗟と征服とあらゆる夢想の対象であり、つまり恋愛の対象なのである<sup>(3)</sup>」。そして、この中国への恋慕者の一人として、かつての“支那浪人”細谷源之助＝北一輝がいる。もちろん、実際の北一輝は2.26事件に連座して1937年55歳で刑死しているから、この細谷＝北はフィクショナルな人物であるが、北のイメージを色濃く示していることは事実である。同じく三島によれば「読後、最も印象の強烈なのは、細谷源之助」であって、作品中、細谷＝北の人物描写はとくにp187～208の「計画」の章に詳しい。以下、その部分に依拠して、この作品での「北像」を若干紹介する。

彼は「歴史を動かすタチの人物だな。今はもう動かす力はないがね」とされる。「軍地(＝竹

内好、井上注記)は戦時中、細谷源之助の著書を愛読した。『日本革新意見(=『日本改造法案大綱』、井上)』や『支那革命談話(=『支那革命外史』、井上)』は独創的な理論と、鋭い文章で軍地を魅惑した。それらは無能な官僚や、愚鈍な学者の所有していない一種の気迫で満たされていた。……細谷の文章には、自分のことばに責任を持つ男の潔癖さがあった。……細谷は少数の決死青年の手で変革されつつある大陸の実情を、身にしみて感得していた。……細谷は日本を世界における強大国に飛躍させようとして、ただそのためののみ、中国の革命的エネルギーを重視したのだ」。

そして細谷＝北は革命における「殺」を強調する。「孫文は) アメリカ仕込みの文明主義者ぢやっただけに、むごいことはできん男ぢや。彼には、殺の大慈悲心が理解できなかったんぢや」。このことに注目して、三島由紀夫は次のように解説している。すなわち、「細谷の“殺、殺、殺!”というあの呪文のような叫びには、おそらくこの作品の隠された暗澹たるモチーフが響いている。細谷はかつて中国を彼流に愛し、彼流に失恋し、その悽愴な恋の思い出を老躯のうちに養っている」と。

ここで描かれているような「殺」に象徴的に集約される強烈な否定的意思、その否定的意思による既存の政治システムないし権力構造への挑戦としての、中国革命への、および中国革命に媒介された日本革命への半ば絶望的な愛着～それはたしかに北一輝という人格の本質につながるものである。この点に関連し、北自身による「一種の気迫で満たされた」「殺」評価の一表現を以下に見ておこう。

「(中国革命に触れて) 今後の大総統及び革命政府が将来永遠なる自由と統一の為に幾十万の中世的魔群を屠殺せざるべからざる義務を天地の大道に向かって負うことを示すものなり。猛虎あり、人を嘯まんとす。虎は美食の自由を叫び人は生存の自由を訴ふ。“殺すを嗜む”ものに非ずんば悪を求むるの自由を斬って正義の自由なる発現を擁護扶植する能わず<sup>(4)</sup>」。

彼の外貌は『風媒花』でどうであるか。「老人の肉体は大きすぎる支那服の皺につつまれ、痩せ細っていた。肉を失ったたくましい骨格と、骨董品の陳列台に売れ残った瑪瑙石のような輪郭のはっきりした眼」。なお、作品上の叙述によれば、その支那服はかつて暗殺された中国革命党員の血に染まった着衣である。青年たちの遺品としてのそれらの服は、いづれも左胸部や腹部に、黒い不吉なしみをひろげていた。これは、いうまでもなく“細谷源之助”についての描写だが、現実の北一輝の風貌にかぎりなく酷似する。

この点に関連し、私の手許にある一冊の本<sup>(5)</sup>の巻頭には、ずっしりと重そうな繻子(?)の支那服を纏った北の肖像写真が掲載されている。鼻下に髭をたくわえた端正で秀麗な風貌はかるく斜に視線を投げ、青年時代に眼疾で右眼の視力を失ったにもかかわらず、その両眼はまさに「瑪瑙石のように」はっきりした輪郭を見せている。この本を入手した学生当時の私はこ

の写真のページに、「寒梅や支那服似合う北一輝」と稚拙な俳句をしたためていた。冬の凜冽たる寒気に咲く梅の凝縮された美、中国革命と“支那浪人”の衣服的な象徴としての支那服、美しく凶悪な滅亡へと疾走する北一輝。これらは、当時の若い私にとって等号でつながっていたのである。

また、別の本<sup>(6)</sup>の巻頭には「支那革命の犠牲」と題して、北が革命運動で生死を共にした宋教仁と范鴻仙の鮮血で被われた遺骸の写真が掲載されている。

このようにして、『風媒花』における一種の“虚像”としての細谷源之助と、“実像”としての北一輝とは、内的な思想ないし感性の面でも、また外的な風貌ないし肉体の面でも緊密にオーバーラップしている。

ついで、利根川裕の『宴』に登場する北一輝はどうか。

今では、この作者と作品を知る人は比較的少ないかもしれない。利根川裕は中央公論社の雑誌編集にも携わり、その後、作家・評論家として活動し、小説はこの作品以外に『館』『開かれた暦』、評論に『北一輝（残念ながら私はこれに接していないし、入手も困難）』『亀井勝一郎』などがある。

『宴』は雑誌『展望』の昭和40年7～10月号に連載、同41年1月に筑摩書房から単行本として刊行、私の手持本は前記のように中公文庫版である。同41年11月に小山明子・高橋幸治主演でTV放映、同時に岡田茉莉子・市川染五郎主演で東宝芸術座上演、42年1月に岩下志麻・中山仁主演、五所平之助監督で松竹映画化と、当時の人気作品であった。

『宴』は、2.26事件を時代的な背景としており、事件における内大臣暗殺者としての館隆一郎陸軍中尉と能の家元の若い妻である観世鈴子との悲劇的な恋愛ロマンだが、事件に関わった多くの青年将校等とともに、北一輝も実名でこの作品に間接的に登場する。「間接的」というのは、北の像は、すぐ後に述べるように、鈴子の兄の白坂世紀と（士官学校を中退、その後左翼運動に走り、検挙後、次に述べる松本の研究所に出入り）、松本匡介（左翼くずれで右翼とも左翼ともつかぬ東亜政策研究所の主宰者）との対話のなかでのみ描かれるからである。ここでは、北一輝という“革命家”が、ある意味で「右翼とも左翼ともつかぬ」独自の存在であったことへの暗喩も想定されるかもしれない。

この点に関連して、松本健一は述べている。すなわち、「左翼は革命、右翼はナショナリズムという分掌は、左翼は階級、右翼は天皇、あるいはまた左翼は進歩、右翼は反動というふうにも置き換えられるわけだが、いずれにせよ北はこの分掌の固定観念を大きく超える存在だった。……そして、この右翼か左翼かという愚劣な議論を超えたところに、“革命家”北一輝の昏い顔が戦慄とともにわたしのなかに甦ってきたのである<sup>(7)</sup>」。

さて本題に戻って、『宴』において北一輝はどのような存在として登場するのか。それは、ほとんど同書 p105～111 の間に集約されているが、前述のような白坂と松本との対話の内で描かれる北一輝像について、以下に若干摘記する。

**白坂** 「連中は (=2.26 事件に関与の青年将校は 井上注記)、口を開けば、われわれの行動の指針は、北一輝の“日本改造法案大綱”だというけど、あの思想のどの部分を信じてるんですかね」。

**松本** 「そりゃ全部よ」。

**白坂** 「全部って？でも、あの思想には、極端な神格的天皇崇拜もあれば、一種の天皇機関説もある。社会主義もあれば民主主義思想もある。かと思えば慄然とするような暴力革命の扇動もある。…不可思議な折衷哲学ですから」。

**松本** 「君はマルキシズム流の理論癖で読むから、折衷主義に見えるだけさ。…青年将校たちが引きずられているのは、理論じゃないよ。連中はそれを理論と思ってるかもしれないが、実はそうじゃない。あの理論の底を流れている、過激で無欲な、ある美しい精神主義の高い調子—あれが青年将校たちを引きずってるものの正体です」。

**白坂** 「では松本さんは北一輝をどういうものと考えているんですか？」。

**松本** 「えっ？思想家でしょう。思想家ですよ」。

**白坂** 「矛盾不整合な理論をもてあそぶ思想家ですか？」。

**松本** 「ほら、それが若すぎる。その価値はともあれ、あれが思想というものですよ。そして彼の思想の本質は何か、と問われれば、こう答えておきましょうかね。ニヒリズム。彼は苦行僧的ニヒリストです。彼の敬虔強烈な精神主義、そして彼の熾烈苛酷なマキャベリズム。それはみんな彼のニヒリズムの生んだ産物です。彼の過激なニヒリズムが、彼自身に強いている一種複雑な夢想なのです。その夢の激しさが、人々にも夢をみごらせる。思想の力ってのは、そういうものでしょう」。

この作品での、北一輝解釈をめぐるシリアスな対論はおよそ以上のものであって、ここでは、北の外貌は視界の外にあるが、前述のような「右翼とも左翼ともつかぬ」彼の暗鬱な表情は仄かに見えてくるといえるだろう。また、北が「思想家」であることは事実であるにしても、このような利根川による北の「行動家」の側面の軽視ないし無視には違和感を覚えざるをえない。『風媒花』の項で先に触れた「殺」に象徴的に集約される強烈な否定的意志とは、まさにニヒリズム～行動的なニヒリズムにほかならないのだから。

ここで、出典についての記憶は定かでないものの（漠然たる記憶だが、ジャン・ジュネの『泥棒日記』あるいは『花のノートル・ダム』や『薔薇の奇蹟』についての三島の所感ないし解説の一節か？）、私は「能動的なニヒリズムとしてのファシズムないしナチズム」という三島由紀

夫の規定を想起する。そして「一種複雑な夢想」としての「彼の過激なニヒリズム」はファシズムないしナチズムのみならず、「極左」たるアナーキズムにも通底していることに着目する。

もう一つ、天皇をめぐる北像について。白坂は松本に詰問する。「北一輝の“天皇ヲ奉ジテ速カニ国家改造ノ根基ヲ完ウセザルベカラズ”という革命主義を、北氏自身信じていない、とおっしゃるんですか」。松本「うん、たぶんね」。松本は、「天皇」という言葉は、この国の最も難解なテーマであって、左翼を躓かせるのも右翼をあやまたせるのも、この言葉だという、だが、おそらく北一輝にとって「天皇」は決して「難解なテーマ」ではなかったのではないか。昭和12年8月19日、北は西田税、磯部浅一、村中孝次等とともに死刑を執行されるのだが、この時、西田税が「天皇陛下万歳を三唱しましょうか」といったのに対し、北は「いや、私はやめておきましょう」と答えた。この結果、誰も天皇陛下万歳を唱えなかったという<sup>(8)</sup>。

極めて夢想的な仮説ではあろうが、もしかしたら北にとって、天皇は革命の「用具」と認識されていたのかもしれない。あるいは、フランス革命がジロンド党からジャコバン党へ、ロシア革命がメンシェヴィキからボルシェヴィキへと革命権力の移行を伴ったように、「天皇を抱いた革命」から「天皇を超えた革命」への移行を北は構想していたのかもしれない。すくなくとも、北一輝という「美しく危険な」人格にとって、「明治大帝」はたしかに尊崇の対象であったが、「大正と昭和の天皇」は大帝の子孫たる「若殿<sup>(9)</sup>」であったのではなからうか。また、さきの『風媒花』における軍地のモデルである竹内好の指摘を引用するとつぎのようである<sup>(10)</sup>。「彼（＝北 井上注記）は終始一貫、天皇機関説の信奉者であり、天皇教に転向はしなかった。……北はなんといっても悲劇の人物である。彼は“オゴタイ汗”にはなりそこねたが、“愚人島”に住む“万世一系の鉄槌に頭骸骨を打撲せられたる白痴の日本国民”からは脱却していた」。

おそらく、三島由紀夫は作家としても行動家としても、北一輝と深く内的に関わっている人物の一人であろうが、次に、ここでは彼の『英霊の声』をとりあげる。

この本については、三島自身の後記によれば、『英霊の声』（昭和41/6月号『文芸』）を発表した機会に、その先行作ともいべき戯曲『十日の菊』（昭和36/12月号『文学界』）と、短編小説『憂国』（昭和35/冬季号『中央公論』）をとりまとめて、いささか不均衡ながら『2.26事件3部作』というような形で、1本にすることができたのは、私の深い喜びである<sup>(11)</sup>とされる。

さらに本書の構成についての三島自身の簡潔な解説を紹介すると、「かくて私は、『十日の菊』において、狙われて生きのびた人間の喜劇的悲惨を描き、『憂国』において、狙わずして自刃した人間の至福と美を描き、前者では生の無際限の生殺しの拷問を、後者では死に接した生の花火のような爆発を表現しようと試みた。さらに『英霊の声』では、死後の世界を描いて、狙っ

て殺された人間の苦患の悲劇をあらわそうと試みた<sup>(12)</sup>。私見によれば、本書は「3 部作」というよりも、「2.26 事件と私」と題されるこの後記を加えて、むしろ「4 部作」ともいうべきものであり、後述するように北一輝との関連で本書をとりあげる場合には、特にそうなのである。

「狙われて」「狙わずして」「狙って殺された」とは、すべて 2.26 事件の死者の生死に関わる表現にほかならない。

この 3 作品自体の中では、北は直接的には登場していない。だが、2.26 事件とそれを生むべき時代の流れにおいて、北一輝がこれらの作品に巨大な影を落としていることはいうまでもないであろう。また、3 作品のうち、ことに『英霊の声』では前述したような天皇への北の思想的関連が間接的ながら仄見えているように思われる。この作品は、神道の神憑かりの会において冥界から甦った「裏切られた者たちの霊」の天皇への愛と呪詛、いわば一種の憎悪愛の物語である。霊の一つは兄神＝「30 年前に義軍を起し、叛乱の汚名を蒙って殺された者（同書 p20）」すなわち 2.26 事件の蹶起将校たちであり、その二つは弟神＝「戦の敗れんとするときに、神州最後の神風を起さんとして、命を君国に献げた者（p43）」すなわち特別攻撃隊の死者たちであり、前者は天皇を抱いた革命を、後者は天皇の国のための献身を「狙って殺された」死者たちである。

2.26 事件の蹶起青年将校たちの呪詛と愛は、「このいと醇乎たる荒霊（あらみたま）より／人として陛下は面をそむけ玉いぬ／などですめろぎは人間（ひと）となりたまいし（p36）」と語られる。そして、神風特攻隊で死んだ若者たちはいう。「われら自身が生ける神であるならば、陛下こそ神であらねばならぬ。神の階梯のいと高いところに、神としての陛下が輝いていて下さらねばならぬ。そこにわれらの不滅の根源があり、われらの死の栄光の根源があ（p47）」る。だが、敗戦後の天皇の「人間宣言」があった。若者たちの生と死の連関は天皇の「神性」に支えられるべきであったのに。「昭和の歴史においてただ二度だけ、陛下は神であらせられるべきだった。……一度は兄神たちの蹶起の時、一度はわれらの死のあと、国の敗れたあとの時である（p58）」。かくして、「などですめろぎは人間（ひと）となりたまいし」という怨念にみちたりフレインが続く。このような情緒、このような感性、このような天皇への憎悪愛を、おそらく北一輝は深く内心に抱きながらも、前述のように距離をおいた天皇感覚・天皇観念を有していたのではないか。

本書の後書き「2.26 事件と私」で、三島は次のように指摘する。「北一輝の思想が、否定につぐ否定、あの熱っぽい否定の颯風によって青年の心をとらえたことは、想像に難くないが、2.26 事件の蹶起将校は、北一輝の国体観とだけは相容れぬものを感じていた。幼年学校以来、（青年将校たちにとって 井上注記）「君の御馬前に死ぬ」という矜りと国体観は一体をなしていたにかかわらず、北一輝は、スコラ哲学化した国体論を一切否定し、天皇を家長と呼び民を「天

皇の赤子」と呼ぶような論法を自殺論法と貶し、君臣一家論を大逆無道の道鏡の論理となし、このような国体論中の天皇を、東洋の土人部落の土偶に喩えていたからである<sup>(13)</sup>。2.26 事件の悲劇は、方式として北一輝を採用しつつ、理念として国体を戴いた、その折衷性にあった。挫折の真の原因がここにあったということは、同時に、彼らの挫折の真の美しさを語るものである。この矛盾と自己撞着のうちに、彼らはずいぶん、自己のうちの最高最美のもの（=天皇ないし国体 井上）を汚しえなかったからである（p227～228）。

すなわち、北一輝の天皇感ないし天皇観が、「兄神・弟神の英霊」のそれとある意味では通底するが、ある意味では深く断絶するという一種の二律背反は、この『英霊の声』に色濃く投影されている。とくに兄神たち=2.26 事件の青年将校たちは（彼らは“蹶起”したが、“革命”の主体たり得なかった）、革命家たる北のいわば鮮烈な鏡像だったのではないか。鏡像（mirror image）とは、いうまでもなく鏡面に映じる“反対”像なのである。2.26 事件と北との根源的な関わりが、ここに窺われる。

さて、三島由紀夫の『豊穡の海 第2巻 奔馬』は、この『英霊の声』3部作と深い内的な関連をもって誕生した作品である。

その点を、これまで参照してきた河出書房版『英霊の声』自体における三島の後書き「2.26 事件と私」から引用しよう。いうまでもなく、『豊穡の海』は明治から昭和に至る日本の近代化をつらぬく輪廻転生を主題とした第1巻『春の海』、第2巻『奔馬』、第3巻『暁の寺』、第4巻『天人五衰』の4部作である。

三島はいう。「たまたま昨年がかかった4巻物の長篇（=『豊穡の海』 井上）の、第1巻を書いているうちに、来年からとりかかる第2巻の取材をはじめた。たおやめぶりの第1巻『春の雪』と対蹠的に、第2巻『奔馬』はますらおぶりの小説になるべきものであり、昭和10年までの国家主義運動を扱う筈であった。それらの文献を渉猟するうち、その小説では扱われない2.26 事件やさらに特攻隊の問題は、適当な遠近法を得て、いよいよ鮮明に目に映ってきていた<sup>(14)</sup>」。

とはいえ、『奔馬』という作品において、北一輝に関する直接的な叙述は僅かであって、この小説の主人公は転生の右翼少年・飯沼勲だが、この少年をめぐる思想的・情動的環境に関わった次の短い文章が北一輝について触れた僅かな部分なのである。

「命をさし出そうとする若者、そう公言している若者を見つけだすのは、それほどの難事ではなかった。しかし彼らは10人が10人まで、すぐ人にも公言できる目的を欲しがり、自分のためのなるたけ華麗な葬式の花環を望んだ。北一輝の『日本国家改造法案大綱（ママ）』は、一部学生の間ひそかに読まれていたが、勲はその本に何か悪魔的な傲りの匂いを嗅ぎとった。

加屋霽堅（かやはるかた、明治神風連の中心人物 井上）のいわゆる“犬馬の恋、螻蛄（ろうぎ）の忠”から隔たることはなほだ遠いその本は、たしかに青年の血気をそそったけれども、そういう青年は勲の求める同志ではなかった<sup>(15)</sup>」。

ここでも、北は、時代を象徴するようなこの右翼少年の暗鬱なアンチテーゼとして、まさに一瞬の奔馬のように、この作品を駆け抜ける。「悪魔的な傲りの匂い」「犬馬の恋、螻蛄の忠からの隔たり」が、前述したような北と昭和の天皇との対抗的な関係を意味していることはいうまでもないであろう。だが、ただ駆け抜けるだけであるのか？ 作品中において、飯沼勲は「眉が秀で、顔は浅黒く、固く結んだ唇の一線に、刃を横に含んだような感じがある（同書 p26）」。

私の独断的な解釈によれば、これはほとんど、支那服を纏い、支那革命に行動し、2.26 事件に連座して刑死する北の危険で美的な表情とオーバーラップするのではないか？ さらに、勲はこの時期の右翼革新の暗殺行動に参画して、司直の裁きに問われるようになるが、同志の青年将校との対話でいう。

中尉 「お前のもっとも望むことは何か」。

勲 「太陽の、……日の出の断崖の上で、昇る日輪を拝しながら、……かがやく海を見下ろしながら、けだかい松の樹の根方で、……自刃することです（p117）」。

そして、そのとおりに巻末は勲の切腹の風景である。私の偏見によれば、これも「天皇陛下万歳」を拒否して銃殺された北の死の風景と重なり、それは時代を超えて、1970年11月、『豊穰の海』を書き終えて、市ヶ谷の自衛隊本部で壮絶な切腹をした三島自身の死の風景と重なっていく。これらの自刃や刑死の、一種輝かしく・また逆に一種暗澹たる風景は、やや煽情的な表現ながら、まさに「奔馬」が死にむかって疾走する風景として私の脳裏に刻み込まれている。なお、「切腹」についての偏執的な愛着は三島由紀夫のいわば「痼疾」であったようで、それに関するもっとも直接的な描写は、堂本正樹『回想 回転扉の三島由紀夫』において鮮明である。

『奔馬』と北一輝との関連について、もう少しつけ加えることがある。新潮文庫版の『奔馬』での村松剛の解説によれば、「第2部の主人公については、氏（＝三島）はその後“昭和の神風連”といたり北一輝の息子と説明したりしていた<sup>(16)</sup>」とある。北一輝には周知のように実子はいない。その「息子」とは支那革命の折の北の同志・譚人鳳の孫の大輝（1945年8月、上海で客死）だが、彼のイメージは飯沼勲とは重ならない。同じく村松によると、「しかし結局作者が『奔馬』でえがき出すのは、昭和10年前後に数多く発生したテロリズムやクーデタ計画の、どれも少し似ていてどれも同じではない事件である。北一輝の息子の案も、放棄された。『特定のモデル？ そんなものはないよ』と『奔馬』の完結後、氏は断言された<sup>(17)</sup>」。

さらに、この間の事情を語る松本健一の叙述がある。「遺作となった『豊穰の海』4部作の創作ノートには、昭和39年秋ごろ一つまり『英霊の声』刊行（昭和41年）の直前からの筆で、

“2.26 蜂起直前、父（北一輝）が息子を救うために、南国に飛ばす。彼、罪の思いに責められ熱帯潰瘍になり死す”とか、“第2部（神兵隊事件 訴訟記録）／作者と同世代／戦争で死ぬまで（北一輝の息子）－熱帯。（美男が熱帯潰瘍で顔を失って死ぬ”とかの記述があり、『豊穡の海』（とくに第2部『奔馬』）が、はじめは北一輝の息子（大輝）を主人公にすえて物語られようとしていた事実がわかる<sup>(18)</sup>”。こうして、『奔馬』は、とりわけ主人公の勲は、当初は北一輝の血の流れの上に構想されていた。だがその構想は、北の「悪魔的な傲り」への三島の内心の反発の故に変化した。三島はやはり天皇への「恋闕」の主体であったのだろう。それが三島の北一輝への深層での共感と、反面の深層での拒否感との葛藤をもたらしていたのではなからうか。この北一輝との内心の葛藤が三島の『英霊の声』や『奔馬』などの作品の深部を形成していたと思われる。なお、蛇足をつけ加えると、「美男が熱帯潰瘍で顔を失って死ぬ」とは、まさに三島の別の作品『癡王のテラス』の根源の風景にほかならないではないか。

また、三島由紀夫の北一輝との内的な関連につき逸することのできない三島自身の短いエッセイがある。それは、『北一輝論－「日本改造法案大綱」を中心として<sup>(19)</sup>』である。この興味あるエッセイのすべてについて言及することはできないが、これまでの私の叙述に密接に関連する部分に若干触れてみたい。

まず、「私は、北一輝の思想に影響を受けたこともなければ、北一輝によって何ものかに目覚めたこともない。ただ、私が興味をもつ昭和史の諸現象の背後にはいつも奇聳な峰のように北一輝の支那服を着た瘦躯が佇んでいた。それは不吉な映像でもあるが、また一種悲劇的な日本の革命家の理想像でもあった（同書p226)」。私の印象では、三島はあきらかに嘘をついている。あるいは過剰に身構えている。北に影響されず、北によって目覚めることもなくて、どうしてこのような表現が可能であるのか。どうして、上述のような彼の文学作品が生み出されたのであるか。

三島による北一輝の人間像描写ないし北一輝評価をさらに続ける。「私は、北一輝を予言者、あるいは思想家として評価し、北一輝の中にあつたデモニッシュな国家改造の熱意が、ある冷厳な性格に支えられていたことを、いつも面白く思うのである。彼はその点ではいつも人間離れがしていた。……北一輝の心の中には革命家としてのファシズムと冷たさが聞きあつていたように思われる。……北一輝の天皇に対する態度にはみじんも温かさも人情味もなかったと思われる。その一点で青年将校との心情の疎隔ができたことは感じられるが、“純正社会主義”の中で現代の天皇制を、東洋の土人部落で行われる土偶の崇拜と同一視している点は、北一輝が天皇その方にどのような心情を持っているかを、そこはかとなく推測させるのである（p230～231)」。

さきに、『英霊の声』について述べた際に、北の天皇感ないし天皇観における一種の二律背反

を指摘したが、この三島の描写も北の深部に存在する二律背反を抉りだしているように思われる。「右翼とも左翼ともつかない」北一輝は、同時に革命家としてのデモニッシュな熱意と冷徹さをあわせ持ち、表層における天皇への冷たく客観的な距離意識の反面での、深層における sympathy の共存を有していたのではないか。「温かさも人情味」がなくても共感は成立し得る。まことに北一輝とは二律背反の・矛盾の・混沌の思想家であり革命家であった。

この点についても、一つの蛇足をつけ加えてみる。SF 作家の山田正紀『マジック・オペレーター 2. 26 殺人事件-』において、作者の全く創作的な人物としてのト部影道という右翼的な策謀家が登場するが、彼は北一輝のドッペルゲンガーである。この作品で北それ自身は、ほとんど前面に出現しないが、「北一輝をその名のとおり、光たるべき人物とすれば、ト部影道もその名が告げるとおり、影たるべき人物（同書 p293）」である。また、「北一輝が輝きを増せば増すほど、ト部影道という影はいつそう深いものになっていくのだ（p395）」。こうして、山田の作家的な感性は北一輝の二律背反性を鋭く捉えているように思われる。

さらに、三島はいう。「私は、北一輝をどうしても小説中の人物と考えることはできない。私が小説の人物と考えるには、ドストエフスキーとは違って、一人の人物の性格がある矛盾を生みながらも統一されていなければならないのであるが、私は北一輝になお生々とした混沌を認めるからである（前掲書 p232）」。ここでは小説中の人物の必須要件として「統一された性格」があるか否かについては、立ち入らない。注目されるのは、北という独自の人物における、ややミステイックな「生々とした混沌」であろう。

さらにもう一点。「北一輝は、私に、よりよき未来及びよりよき社会というものの追求 が何らかの悪魔性なしには行われぬという不断の生々しい教訓を与えるのである。北一輝の憲法、その“日本改造法案大綱”は、いわば当時のなほはだ窮屈な天皇制国家の中における人間主義の叫びであったように思われるが、この人間主義の叫びは、常に血にまみれていた（p233）」。この「悪魔性」「血」こそが、『風媒花』中の細谷源之助＝北一輝の“殺、殺、殺！”の呪文のような叫びと通奏し、北という思想家・革命家の「危険性」の根源をなしているように思われる。

そして、久世光彦『陛下』に登場する北一輝について見る。

中公文庫版でのカバーの惹句によって本書の概要を記すと、「幼いころから繰り返しみる夢のなかで、陸軍中尉・剣持梓は、“陛下”への熱い思いをつのらせていた。戦死した兄が慕っていた北一輝との交流を通じて、梓もまた、叛乱へと身を投じてゆく。2. 26 事件を縦糸に、梓を慕う娼婦、弓との交情を横糸に描く、甘美で衝撃的な恋愛物語」である。この作品では、ほとんど全編を通して北が登場するが、文庫版解説での松本健一の短い文章は次のように結ばれている。

「北はたしかに何かを待っていたのだった。何を……。『美しい革命を』。そのロマン的革命家の原像に、剣持梓はあこがれ、恋をする。そして、久世光彦は北一輝に恋をする剣持梓を、みずからの内部にかかえこんでいたのだった<sup>(20)</sup>」。なお、つけくわえると「梓弓=梓の木で作った丸木の弓」という語があるように、剣持梓は娼婦の弓と分かちがたく結合し、また「刀剣と弓」を身につけて“美しい革命”にとり憑かれた存在である。

すなわち、久世のこの著作は「陛下」を核とする梓、弓、北の恋の曼陀羅図なのである。あるいは、北を媒介とする弓→梓→「陛下」という恋の連鎖図なのである。だからこそ、この本の題名は『陛下』なのである。そこで、これまでも触れてきた「恋闕(れんけつ)」という言葉について述べておかねばならない。辞書によれば「恋」とは「断ちきれずに心がひかれる、思いわびる、いつまでも慕わしく心が乱れるさま」であり、「闕」とは「宮殿の門、宮城、天子のいる所、禁闕」とある(学研『漢字源』)。これが原義だが、上記の松本の文庫版解説はいう。「美しい女びとに恋するように、天皇のことを思慕する。これを恋闕という—そう教えてくれたのは、30年ちかくまえ三島由紀夫の蹤(あと)を追うように自決していった村上一郎さんだった<sup>(21)</sup>」。

このようにして、北一輝は本書の主人公の一人であって、ほとんど全編にわたって直接あるいは間接に登場する。したがって作品に描かれた北一輝像のうち、私にとって印象的な一部をあげるにとどめておこう。以下、引用は初出の新潮社版『陛下』による。

直接的な北像のうち、まず、あげなければならないのは北の「眼」についての描写である。「(北が弓の店・花酒家で将校たちと飲む時) 咽喉仏を見せて飲む度に、仰向いた左の目は天井を向くのに、右の目は正面の弓の方を見たままなのが怖かった。—やっぱり、あれは義眼だったのだ(同書 p56)」。 「(ニコライ堂で梓が北と会った時) 北さんだった。ゆったりした支那服の手をあげて、梓に笑いかけた。まるでその刻を待っていたように、それまで隠れていた太陽の矢が、西の窓の色ガラスを透して北さんの顔に降りかかり、右目の義眼を金色に染めた(p72)」。 「そして北さんは、右手の指で眼球を摘み、それを梓の目の前に突き出した。思わず、梓は後ずさった。……北さんの指が、器用に動いて眼球を反転させた。何かぼんやりとした小さな人の像のようなものが、一瞬球面に見えて、消えた。北さんが、手品みたいに隠してしまったのである。(それは、右の義眼の裏に貼りつけられた天皇の肖像。もちろんフィクション 井上) …… “私は生きている左目で、曠野を見えています。その代わり、見えない右目で、陛下を真っすぐに見ているのです”(北の言葉 p80)」。

この両眼の背馳、左眼と右眼との二律背反、左における「天皇を超えた」荒涼たる革命へのデモニッシュな志向、右における「天皇を抱いた」恋闕の思いの可能性、それらの「混沌」を被う暗澹たる一種のニヒリズムの匂い、ここには北一輝という人間像の本質的な側面が、いか

にも久世らしい、やや耽美的で感傷的な表現のうちに象徴的に集約されているように思われる。もう少し、つけ加えると「北さんは、どうして義眼の裏に陛下の肖像を貼りつけているのだろう。……北さんには、ほんとうに陛下の姿が、すぐそこに見えるに違いない。……北さんは、陛下に迫っている。ひるみそうになる魂と体を、立て直し立て直し、それでも迫りつづけている。……梓は、北さんの“日本改造法案大綱”というのは、北さんの目が流した血で書かれた、凄惨な恋文ではないかと、ふと思った (p111~112)」。

なお、北の幼時からの眼疾、その結果としての義眼の使用は事実である。そのことに触れておく。「(北は) 尋常小学半ばで眼病をわずらい、母の生家の新穂村の眼科医にかかって、1年以上も学校を休んだ。北にとってこの眼病が、将来を支配するもの」「(中学) 3年級になってまもなく、北の眼疾はまた再発した。……病名はブテレギーム。目尻から肉が出て白眼をおおい、さらに黒眼をおかしにかけていた」「(19歳の時痲疾の眼病が再発して佐渡へ戻ったが) ある日、放心したように歩きまわっていた北の眼が、樹の枝に強く触れた。それが十数年来悩みつづけて、大切にしつづけて来た右の眼であった。万事休す。……北の眼疾は容易に快方にむかわなかった。治療を終った北は、ついに右目の明を失って退院した<sup>(22)</sup>」。

また、北の外貌に関する描写で逸することのできないのは、やはり「支那服」のイメージである。「確かにあの黒い支那服は変な人だった。軍人さんたちが顔を赤くして一頻り喋りまわると、支那服がポツリと何か言う。するとみんなが感心したように熱い溜め息を漏らして、しばらく黙りこむ (p55~56)」。「湯島天神の境内は点々と白梅が咲いているようである。梓は、北さんと並んで絵馬堂の低い縁に腰かけていた。北さんの支那服は、今日は艶のある厚地の黒で、衿と袖口に刺繍された同色の竜が、北さんが身じろぎするたびに、生きているように蠢く (p112)」。

この支那服イメージの原点を形成するのは、彼の辛亥革命への参画、とりわけ暗殺された盟友・宋教仁との革命行動の体験であろう。久世は描く。「赤煉瓦造りの堀に沿って、夜霧の中を男が二人、手を取り合ったまま走っている。闇の中でも炯る眼を持った支那の若者と、隻眼の日本の青年である。二人とも鋭く痩せて美しい。……梓がはじめてみる、革命の美しい光景だった (p92)」。また、久世は描く。「宋教仁は、大正2年の3月、上海北停車場前の路上で、刺客に鋭い刃物で胸を刺されて死んだという。春霞の漂う石畳に俯せに横たわっている宋の姿を、梓は想ってみた。……北さんの笑わない左目は、もうこの世の、すべての重い、悲しいものを見てしまった目に違いない (p87~88)」。

北は革命家であるが、肉体を行使する直接行動として革命に参加したのは、この「支那革命」だけである。もしかしたら、北にとっての支那服の着用は、一種の根源的な「衣裳」であった

のかもしれない。そして、「殺」に直面する。北の左眼はこのときから、「曠野」を見るのである。ここで、北の外貌として本質的に特徴的な「眼」と「支那服」は、いわばその内面において結びつく。

この作品における間接的な北像は、当然に、直接的なそれほどには鮮明ではないが、若干触れてみる。まず、梓が戦死した兄の書棚で初めて見た北の著作についてである。「優しい色や文字の西洋の詩集や画集の中では、“日本改造法案大綱”という角張っていかつい文字だって、いかにも場違いな気がする。……北一輝という名前をみただけで秋の夕日は、ふと翳りたくなるのだろうか。……そう思って眺めると、“日本改造法案大綱”は、なんだか不吉な妖術の本のようである。……家族の誰にも知られないで、兄はヴェルレエヌの詩句とは程遠い、呪文のような“日本改造法案大綱”を読んでいた (p47～49)。

これは、この私の小論で後述を予定している“「魔王」ないし「呪的存在」としての北一輝”の姿の一面を照射する表現ではあるまいか。さらに続く描写は、「梓には、このしつとりと重い書物が、こんどは桃色の恋文の束のように思われた。兄の小さな魂を生暖かい手で掴みとった北さんは、やっぱり魔王なのだろうか (p49)」。この呪的存在が 2.26 事件にどう関わるかは、梓を含めて「蹶起」する青年将校たちにとってのクリティカルな問題であったにちがいない。しかし、北は北である。左眼が曠野を、右の義眼が天皇を凝視している北一輝は、呪文を称えつつ、「美しい革命」を展望しながら決定的な一歩を容易に踏み出せない。「けれど、北さんがいないと不安な気持ちは、全員にあった。ほんとうのところ、いまこの部屋にいる十数人には、誰も陛下が見えないのだ。北さんにだけは、陛下が見えているとみんなが思っているから、北さんのいない蹶起が心配なのだ。……魔王はいま、みんなに痩せた背を見せて法華経を称えている。振り返ってくれない (p147～148)」。

このようにして、久世のこの作品における北の像は美しく・悪魔的である。その美しさや悪魔性の根源は、支那革命体験に裏打ちされ、「陛下」ないし「国体」～したがってそれへの「革命」に関わる真眼と義眼との両義性に拠っているように思われる。

さて、手塚治虫の『一輝まんだら 上・下巻』を「文学」として捉えることは、前述のように、若干ミスリーディングかもしれない。

だが、タイトルには真正面から「北一輝」がある。あまり多くを語ることはないが、すこし触れてみる。この作品は上巻 272 ページ、下巻 278 ページに及ぶが、上巻では北は直接には登場してこない。ここでの主な登場人物たちは、革命を直後に控えた清朝末期の中国を舞台に、虐げられた民衆、扶清滅洋のもとに結束する義和団、日本の軍人、やがて革命の主要な担い手となる章炳麟、そして後に日本に亡命して北と接触することになるヒロインの姫三娘などであ

る。

下巻に入って、この三娘が章炳麟につながる革命家という形で日本に亡命、黒龍会に身を寄せ、若き北一輝を知る。この時、北はすでに眼疾プテレギームに罹患、右眼に黒い眼帯をつける青年として描かれ、三娘にかつての初恋のひと松永輝のイメージを重ね合わせる。二人の間に、奇妙な愛の芽生えも生じるが、それは芽生えにとどまる。北は明治39年22歳にして『国体論及び純正社会主義』を書きあげるが、出版を拒否され、失意のうちに三娘とも別離する。ここで、やや唐突に物語は終り、最終ページでの文は『『国体論と純正社会主義（ママ）』をたずさえた北輝次郎はやがて自費出版までして、自らの主張を世に問うことになる。姫三娘はこのあと北輝次郎とどのようなかわりを持っていくのだろうか。……上海の章炳麟は？さらに孫文は？いくたの人間の多彩な生涯を彩に、激動のアジアは明治から大正・昭和に突入する（同書下巻、p278）。

このように、本書では青春期の北一輝像のわずかな側面を描くにとどまっている。やや幼い恋の変転、早熟な社会主義ないし革命思潮への関心の高まり、宿命的な支那革命との関わりの形成、宿痾であった右の眼疾を示す黒い眼帯等々、青春期の北を形づくった主要な要素がここに描かれていることは事実である。この作品は、もしかしたら『支那革命外史』の実体験や、日本への帰国から2.26事件の刑死に至る「北一輝物語」の長大な作品の序曲としての位置づけを持っていたのかもしれない。上述のような物語の唐突な終末とそれに続く短い文章は、それを示唆しているように思える。北一輝をテーマとする手塚治虫の大河マンガは、北の「革命」と同様に途中でやや唐突に切断される。

この「文学」に登場する北一輝の項の終わりに、やや夢想的な蛇足をさらに付け加えよう。

「日東の剣侠児」本郷義昭を主人公とする山中峯太郎『大東の鉄人』は、戦前、少年期の私の愛読書の一つであったが、そこに登場する「鉄人先生」のイメージは北一輝と強くオーバーラップするものである。満州興安嶺の奥深き天佑谷に、「ふしぎな神様のような人<sup>(23)</sup>」が住む。「大興安嶺に雪深し、アジアの大東を守る鉄人先生（同書p260）」の像は、当初、私にとっては「書中、“革命支那”の為には支那の武断的代統一を力説し、日本の“革命的対外策”の為には南北満州と西比利亜の領有を力説した<sup>(24)</sup>」北一輝が美しく老いた像と結ばれていた。

本郷の到着を迎えて姿を表わすその人物の描写は以下のようなようである。「雪のような白髪を頭から両肩へたれている。しかも、からだ高く堂々として、着ている毛皮外套も白狐の毛をあんだものらしく、まっ白な巖が動き出たように見える。月に照らされて、全身が神々しく白くかがやく。……この人、白く長い髪を、胸の上に左手でにぎりながら、関東軍司令官の本庄中将をただ“本庄”と言う。本郷に向かって弟子のように言う（p33）」。だが、鉄人先生とは、実は日

露戦争当時の英雄的な軍人・仁平大隊長であった。「28年後、“予の死骸を踏んで義戦に勝て”と鉄人先生が言われる。ああ大東の鉄人先生こそ、28年前の仁平大隊長なのだ (p257)」。でも、もしかしたら、昭和7年8月～8年12月号にかけて少年倶楽部に連載されたこの作品で、山中峯太郎は一定の「政治的配慮」をして、「北一輝」を「仁平大隊長」に置換したかもしれない(山中は幼年学校出身の陸軍将校の経歴を持ち、当時の革新将校の影響下にあった可能性がある。井上)。

私にとって「大東の鉄人」のイメージは北一輝と濃く重なり合う。そのような私の「夢想」の根拠は二つある。一つは「北一輝伝説」における北一輝＝満州生存説の幻影である。これは、源義経＝ジンギスカン説や西郷隆盛＝生存説と同じような大衆の一種の英雄生存伝説の流れに位置するものではあろう。「死刑の執行ののち、昭和20年ごろまで、北一輝の死刑は執行されなかった、かれは生き延びて満州に渡り、いずれ戦争が終わったら帰ってくるという噂がひそかに囁かれていたという。……北一輝の遺骸は誰もみていない、北は殺されずに満州に送られたのじゃないか、という伝説……。ともあれ、こういった死者の生存説はいずれも、かれには死んでもらいたくなかった、生きていたらどんなにかいい仕事をしように、という大衆の挽歌にはかならない<sup>(25)</sup>」。

これまでにみたように、北一輝が多くの文学作品でとりあげられていること自体が、彼の特殊性・独自性を端的に物語っているが、それは繰り返し輪廻転生する「北一輝伝説」の一つの流れに位置する現象なのかもしれない。この意味に関連して、さきに触れた三島由紀夫の『豊穡の海』全4巻が主人公の「輪廻転生」テーマに貫かれていることは印象的である。

もう一つは、「神のごとき」イメージについてである。前記のように、鉄人先生は「ふしぎな神様のような人」であった。ここで、私は北の『国体論及び純正社会主義』における「類神人」を想起せざるを得ない。独特の進化論解釈の上に立って北はいう。やや長い引用だが、それを以下に記してみる。「吾人の神と称して人類より遙かに進化せる生物が他の遊星に生息するならば、而して吾人人類の生息しつつある此の遊星が他の其れのごとく進化しつつあるならば、而して又進化に極点なく、人類が進化の極点に非らざるならば、吾人人類は将来に進化し行くべき神と過去に進化し来たれる獣類との中間に位する経過的生物なり。今日、吾人人類は人類の猿猴類と別れたる時代の祖先の化石を発掘して類人猿と名くる者を見出すならば、吾人人類が類人猿として消滅せるとく更に人類として消滅せる後に於いては、吾人人類より分かれて進化せる人類の子孫なる神の化石学者によりて“類神人”として発掘せらるべき半神半獣の在者なり<sup>(26)</sup>」。

この「神」が、唯一絶対的存在として一般的な「神」概念と異なることはいうまでもない。北はいう。「吾人は従来多くの宗教の用い来たれる神という語の意味する思想と区別せんが為に“神類”の文字を用い来たれり(同書p195)。人類の到達する可能性としての「神類」、それ

が北の「神」であり、私の夢のなかでは北は自分自身を、やがては「神」に接近する「類神人」に擬していたのではないか。この点において、「大東の鉄人」の風貌は美しく老いたる北一輝のそれに限りなく重なりあうのである。

## II. 「詩人」としての北一輝

いかなる観点からではあれ、「詩人としての北一輝」に最初に着目したのは、おそらく田中惣五郎と思われる。北の青年時代に触れて、彼の次のような描写がある。

「中央で、与謝野鐵幹、晶子を中心とした“明星”がはなばなしく旗上したのはこの年4月（明治33年）であって、北の浪人生活とほぼ同じころであるが、ロマンチックな明星の情緒が北をひきつけたと見え、最初の號から送ってもらい、みずからもさかんに詩をつくった。浜辺にたたずむ時が多くなり、ときどき投稿した。鐵幹の手紙が、ほめた文字をのせて北をおとずれ、北もおおいに得意であった。……鐵幹の“東西南北”“天地玄黄”晶子の“みだれ髪”などが、“明星”とともに北の机辺を明るくした<sup>(27)</sup>」。

さらに、北の青年時代をクローズアップした代表的な評伝は、松本健一『若き北一輝』であるが、本書のサブタイトルは、いみじくも「愛と詩歌と革命と」である。この本は、ほぼ全面的に再掲されて前出の『評伝北一輝 I 若き北一輝』となるが、とりあえず、『若き北一輝』掲載の「北一輝初期年譜」等から若干の事実関係をあげておくと、下記のとおりである<sup>(28)</sup>。

1900（18歳）「明星」に心酔する／松永輝（北の恋人）との交際断たれる？

1901（19歳）阿部眼科病院（入院中）から「明星」に短歌を投稿、2首採用される

1902（20歳）牧野が幹事の「佐渡誓水会会報」に短歌2首投稿？

1903（21歳）武蔵坊弁慶の名で「新潟新聞」に「新派和歌談」他の歌論執筆／同歌論が加筆訂正の上「鐵幹と晶子」と改題されて「明星」に掲載／父慶太郎死す

1904（22歳）短歌の他に、長詩「逍遙」「相思」「別恨」などを作り、夏、上京

1905（23歳）「佐渡新聞」に一社友の名で「佐渡中学生諸君に与う」と題する激烈な革命長詩を掲載

また、この『若き北一輝』により「詩人」的な側面を示唆するような「詩」作品をいくつか例示してみる。まず短歌として、逝去した父の墓に詣でた際の歌。

・老ひし若き世は皆斯くて暗（やみ）にゆきぬ／彼も暗にゆく我も暗に行く（同p116）

ついで、「佐渡新聞」への国体に関する投稿が「不敬事件」を惹起、それへの批判論難に対抗する歌を数首。

・はぬけ鳥めなし鳥さえうちむれて／今日のなぎさに立ちさはぎつつ

- ・こざかしきそしり懲らさんと抜きし劍／袂捉えし加古川のなくば
- ・おうさなりそしりに非らずほまれなり／理想の冠額（ぬき）にのせられ（p182、184）

これらは、若い稚拙な歌である。いかにも明治の新時代の若者らしい情感と客気にあふれ、「明星」一派とくに与謝野鐵幹のかなり色濃い影響も認められるが、修辞の幼さ、多くの「詩」に本質的に存在する「内的なリズム」の不足が容易に見出される。この段階では、北は「詩歌」の世界につよく引きつけられ、「歌」作をしたが、なお「詩人」とはいえない。「詩」世界参入への直接的な誘因が父の死、恋人との強い別離、自らの思索・観念への攻撃に対する反発などであることも、青春とりわけ時代も個人も青春のさなかにあった明治の青年に共通するものといえるかもしれないが、北の「詩」はまだ「詩」の本質的な領域からはやや隔たっているように思われる。

だが、転機が訪れる。やや感傷的な思いを込めた松本健一の叙述によれば、「不敬事件」のうち、「北がふたたび筆をとったとき、胸奥を衝いて吹きだしてきたのは……激情のうちに謡い出した3篇の長詩である。……“別恨”で彼は歌う。

大丈夫五尺のむくろ／犠牲（にえ）として割かるべく生る／先づ目覚めて叫ぶ者／世は彼を獄門に晒す。

浪漫的詩人が誕生していた。北輝次郎にはじめて詩が生まれていた。……詩評論者の己の詩が生まれていた。……（松永輝との 井上注記）恋愛の諸相を体験することによっても詩歌は彼のものになりえていた。……真正国体論で吾人の帝国の最高権力者を明治天皇に擬していた彼が、みずから詩人として登場したとき、その幻想にはわかに消えとび、そこに彼自身が立っているのを意識した。天命が彼に下っていた。いや、天とは彼自身の意に外ならないことを、今こそ詩人は悟っていた（p221～223）。

ここでの北の天皇観ないし国体観についての解釈は前に I で触れたので立ち入らない。ただ、修辞や内的なリズムはいま一步の憾があるものの、まさに渾然一体化した「愛と詩歌と革命と」への転機が「逍遙」「相思」「別恨」という3つの長詩によってもたらされたことに留意しよう。そしてまた、愛と別離（恋人輝との）、死（父の）、革命への渴望（とくに国体についての）などが近代の革命的ロマンチストの情念に分かちがたく固着していることにも留意しよう。

さて、それぞれが長詩であるので、その引用（p229～235）は部分にとどめるが、まず「逍遙」から若干あげてみる。

- ・振分髪肩過ぎしより／西東、恋はれ恋ひしに／病みて一歳を郷に送れば／たぎりたつ胸の潮や ……

よべ、月の磯／御手執りて行く／いたいけや／颯々として風にだも堪えず……

わが胸に額よせて／君、前髪の乱れや／月雲に入りぬ／いざ許せ甘き接吻（くちづけ）

ついで「相思」からあげる。

・想はざりき、たまたまの其の夜／逍遙の磯の月／世の母は斯くもあるべし／袖やはらかに蔽ひてぞ逢わさぬ……

ろうたげや眉愁に閉じて／鬢のほつれのいたいたし／針持つ御手も細う／  
終日垂籠めておはすと……

恋しとや／さもありぬべし／苦しとや／然もありつべし

小さき胸の如何にか痛みし／涙の跡繁き／文字の乱れに／血のしたたりを見る

これらが、松永輝への恋慕と彼女から引き裂かれた別離への想いを主題としていることはいうまでもないが、「明星」の一群の詩や島崎藤村・北村透谷などの若書きの新体詩の一群とまるで同じ世界ではないか。明治の先端的な詩的青年たちと類似する関心・感覚がここには存在するようである。幼い稚拙さはなお残るものの、北の「愛と詩歌」はここに生まれた（下線は井上、下記「血の滴り」参照）。

この点について、ふたたび松本健一の指摘を引用すれば以下のようなようである。「いま、この“逍遙”および、同時にうたわれた“相思”の2篇の詩を過大評価するつもりはさらさらしない。それは“明星”の影響を大きく受けた、当時としては格別珍しくもない恋愛詩である。恋愛が哀調をかなで、甘美さが漂おうとも、客観的にみれば、それは彼独自の詩作とはいえない。にもかかわらず、これが彼にとって初めて生まれた詩であることはまちがいないであろう（p232）」。

ここで、私はこの小論の冒頭に記した『支那革命外史』の「歴史とは斯かる魂より滴り落つる血の聯続であるのか」という一節を強く想起する。北の少年時代の「愛」における「血の滴り」は、あたかも壮年時代の「革命」における「血の滴り」に重なるようだ。

そして、輝との別離へのルサンチマンを踏まえた「別恨」からの引用（p256～261）。

・暗の底逝く信濃川／音の徒らに高き／思はてなの胸もたせて／独り欄に倚る……

遙けくも来つるかな／四十九里、桃源の郷／いとほしの君／君、今夢円かなりや……

など世の斯くは冷たき／百年の後契ぎりて／固く執りし手と手を／引き放ちて何の  
道徳ぞ……

月もる松に身を寄せて／うすものの袂長き／あを見つめ居るさまの／消へも  
入るらむやう……

大丈夫五尺のむくろ／犠牲として割かるべく生る／先づ目覚めて叫ぶ者／世は彼を  
獄門に晒らす……

病骨志士の義を抱きて／浪々東又西／亡命他邦の鬼やらん／梟首月蒼き獄門にか

恋からの強いられた別離、その「別れ」への「恨み」が「別恨」と表現されたことはいうまでもないが、この愛からの切断は「目覚めて叫ぶ」「大丈夫、志士」への転機となる。3篇の長

詩を残して故郷を追われた北一輝は、1904年22歳の夏、革命への漠たる思いを抱いて上京する。ここで、「愛と詩歌と革命と」の連関がめぐり、「夏の終り」に「浪漫的革命への旅立ち」がはじまった（松本同書p255および265のタイトル）。

なお、これはまったくの蛇足だが、萩原朔太郎の詩の一節に、

「少年の日は物に感ぜしや／われは波宣亭の二階によりて／かなしき情飲の思いに沈めり／その亭の庭にも草木茂み／風ふき渡りてぼうぼうたれども／かのふるき待たれびとありやなしや／いにしへの日には鉛筆もて／欄干（おばしま）にさへ記せし名なり<sup>(29)</sup>」

がある。これは、上記の「別恨」詩の第1連の情景と色濃くオーバーラップしないか。

翌1905年9月に、祖母の死のため北は一旦帰郷し、年末には再度上京するが、その際、「佐渡中学生諸君に与う」と題する当時としては激烈な革命へのオマージュの長詩を「佐渡新聞」に発表した。上と同様に、その一部分を示す（同p274～280）。

・西比利亜（シベリア）の原吹風に驚き駈る北山の雷／濛々漁歌は霞む朧月恋が浦の波／  
此处古城の址松籟清きところ／三百、青春花顔の友は集ひて／聳り立つ学窓の日に  
眩ゆき……

さはれ友よ、夢に過ぎじ／窓外試に眼を移して社会の現状（さま）を見る／何の理想あらむや／何の意気あらむや／坤球さながらに地獄の底……

友よ、革命の名に戦慄くか（おののか）／そは女童のことなり／良心の頭上何者をも頂かず／資本家も、地主も／ツアールも／カイゼルも／而して…（言ふべからず！）／  
霊火一閃、胸より胸に／罪惡の世は覆へる／地震（なへ）のごと／大丈夫斯くてこそ世に生まれめ……

ああ友よ／名を求むるか、脆ろし／理想こそ永久なるー／ソーシアリズムあり／  
恋か、小さし／意気のみぞ不滅なるー／デモクラシーに来たれ／棺を蓋ふも名は定まらず  
／緘手何ぞ瞑目の枕ならむ／裸形六尺の骸／血滑らかに／ギロチンの刃にこそ

ここで念のため、わざわざ括弧書きされた「（言ふべからず！）」とは、あきらかに天皇を指している。「愛」からの断絶はさらに鮮明である（「恋か、小さし」）。3篇の恋愛長詩を経て、若き革命的アジテーターの「詩歌と革命と」の新たな領域が出現した。この「佐渡中学生諸君に与う」の成立の意味に関して、つぎのような松本の指摘がある。

「革命詩の詩境は、紙の上に書かれる詩篇の成立する極限にあった。北はこれ以後、詩を政治の上に描く運命に踏み込んでいた。詩の最たるものこそ“吾人の帝国”を建設する営為である。だから現世的にいえば、“佐渡中学生諸君に与う”は、詩との訣別を意味していたのである（p280）。だがここで、北にとって果たして「詩との訣別」は訪れたのであろうか。私はそうは思わない。短歌や新体詩という形式としての北の「詩歌」は、たしかに終焉を迎えたかもし

れない。しかし、「詩境」は存続する。北から詩（形としての）は失われても、詩人的な資質（内在するものとしての）は失われることはなかったと思う。だからこそ、私は「詩人」としての北一輝」と題する1章を設けたのだが、この点については少し後に、とくに『支那革命外史』に即して再説する。

さらに加えて、北一輝の詩人的な側面を強く意識したのは村上一郎である。そのことを端的に示す彼の文章がある。すなわち、「もし、北が青年歌人として出発した日のころに生きて、一個の詩人として自任し得ることがあったならばと、憶測してもしかたないことを思うのであるが、しかも彼はかつて詩人としての自任を思う日があったからこそ、かろうじて何もののエピソードでもない自立したイデオログとして生き死にし得たのではなかったか。そして枯々とした垣ひとつへだてて青年将校たちと接触するのほかに、南無を唱える心境に赴いたのではなかったか<sup>(30)</sup>」。私の判断としては、「枯々とした垣ひとつ」とは、おそらく天皇ひいては日本の国体、その「革命」についての理解や認識の北と青年将校たちとの間の「垣根」であろう。それはさておき、ここで村上が鋭く指摘したのは、青年期に形成された詩人的資質が独自の「革命」イデオログ、そして行動への媒介者としての「革命」アジテーター、さらに支那と日本の「革命」の実行動者としての北一輝という存在のいわば「原質」をなしていた、ということと思われる。

なお、私にとって印象的な村上の北一輝解釈の文章を、北に関わる「文学ないし詩」の視点から、同書（村上『北一輝論』）に即してもう少し追加してみたい。やや長い引用だが次のようである。

「北一輝が、自体文学的な仕事とはきわめてかけはなれたところに立っていたにもかかわらず、今日彼をかえりみ、かつ彼について水準的な労作をなすものが、多く文学者ないしすぐれて文学者の気質をそなえた思想者に限られているように見うけられることは、偶然でないと思う。北の生涯と仕事とには、何か人間におけるどす黒いものが流れており、それが異様な抵抗感をもって人に迫る衝撃をもたらす事実なしには、人の文学的な気質に訴えかけることはあるまいと思われる。単に北の呪術によるものであろうか。北のアラバスクな文体は漢学の教養にもとづく他のどんな文体にも欠けた攪拌力を保有し、それは、思想における何らかの苛烈、残酷な趣きといってもよい。……終始、北は危機意識をみなぎらせた思考をつづけた（同書p5）」。

「文学者ないし文学者の気質」の者による「異様な抵抗感」を伴いながらの北への愛着と反発、北のアラバスクな修辞への apathy と sympathy、北のイデオロギーと行動への偏愛と憎悪、これらは明治から大正を経て昭和初期の刑死にいたる生涯にわたって、北一輝が「他者」から受けた通奏低音にほかならない。まことに北とは、先にも触れたように「二律背反」の・また

「憎悪愛」の対象としての存在である。後にも述べるが、私の理解ではこの一種の antagonism  
こそが「詩」の本質に関わってくる。

またまた蛇足ではあるが、この北一輝論を展開した村上一郎を理解する一助として、本書の  
叙述を踏まえ、若干つけ加える。村上自身によれば、「5.15 事件も 2.26 事件も、わたしには身  
近かであった。その理由は三つある。一つは、親戚にあたる或る人物が、その二つの事件の“被  
害”をうけた内閣の末席に列していたことである。二つは、わたしが剣道に通い、氏原陸軍少  
佐らの軍人に文と武を学んでいた宇都宮は何よりも“軍都”であったということだ。そして第  
三には、わたしが、いまの言葉でいうならエモーショナルに育てられまた自らそだったからで  
ある (p151~152)」。このような出自ないし生育環境は「北一輝ないし北一輝的なもの」への関  
心を形成しやすいためであろう。もう一つ、この書の第 3 章「私抄“2.26 事件”」のエピグラフで、  
村上があげた一つの「詩」はこうである。

「夢のように／凍えきったテロルを／聴いた黄昏／白い葉裏に翻る陸言に／殺意をこめて／  
おそらくはひとつの錯誤／屹立する唇に／俺は手向けた／この世のありとあらゆる 美学を」  
(阿久根靖夫『わが幻の……』第 1 聯)。

私の感性では、この「詩」は、北の「詩」と本質的に同根である。

前述のように、「佐渡中学生諸君に与う」を最期に、詩の形式をとった文章は北から訣別した。  
だが、それ以降の彼の多くの「散文」は武田泰淳の『風媒花』で捉えられたように、「一種の気  
迫で満たされていた」「鋭い文章」を特徴とする。それは、いわば最も美しい凶器としての日本  
刀の刃を想起させるような文体であり、部分によっては朗唱にも堪えられる潜在的な韻律感、  
凝縮された内的なリズムを有している。上記の村上一郎の指摘にあるように「北のアラベスク  
な文体は漢学の教養にもとづく他のどんな文体にも欠けた攪拌力を保有し」ている。「攪拌力」  
とは読む人の心を攪拌し・衝迫する詩的な力にほかならないであろう。冒頭に触れたように、  
若き日の私が最初に接して衝撃を受けた北一輝の著作は『支那革命外史』であるが、『外史』は  
そのような文体の最たる典型であり、まるで一篇の叙事詩のような印象をもって私に迫った。  
もとより、ここでその文章の多くを列挙することはできない。そのため、なかで私の心に強く  
迫った「詩的な」部分を少しだけあげてみる。以下、すべての引用はもちろん 1911 年以降の「興  
漢滅清」「滅洋排滿」の中国・辛亥革命に参加した北の実体験を踏まえた行動と詩的な感懐を基  
盤にしている。なお、この「支那革命」とは「滅清排滿滅洋」において民族革命であり、「興漢」  
において近代化・民主革命であるという私の理解を付記したい。

まず、革命勃発前の緊迫した環境についての詩的表現。「国民は利権回収の故に血を絞って持  
てるものを奪われつつ始めてチュレリー宮殿の売国奴を発見したり。“市民よ国危ふし”。国立

報は世論の鐘楼に登りて存亡の急を乱打したり。遙か北の方を指せる愛国運動者の指揮刀は転じて蜀の天に向かへり。四川乱る。革党の軍隊運動は武昌に突発したり。長沙応ずるに至て両湖の中原火を噴く如く、愛国運動は終に諮政院の弾劾となり盛宣懷は北京を亡命せり。万里長江の雲黒うして革党の飛躍電の如し<sup>(31)</sup>」。

ついで、まさに往年の「若き北一輝＝詩人」を思わせるような、こみあげる情念に満ち・なおかつその溢れんとする情念を抑制しようとする美しい叙述、それは革命の実見によって心の内部を「攪拌」された北の「詩境」の表明であるように思われる部分をあげる。この一節は『外史』のなかで私が最も心動かされる叙述の一つである。すなわち、「何たる悲壮なる眺めなりしぞ。楼上より見渡せる歴史多き金陵の山河は雨に烟ぶりにて清朝三百年の亡び行くを咽ぶ者の如く、古今の興亡一夢の如しといへる古人の涙は今一実見者の双頬に滂沱として流れたり。昔者羅馬の將軍シピオ、カルセージ城に挙がる火を眺めて、誰か百年の後我羅馬の亦斯くのごとくならざるを知らんやと言へり。興の道を踏んで興あり亡の跡を追ひて亡あり。日本亦焉んぞカルセージの火に泣き金陵の雨に咽ばしむる日の来るなきを保するものぞ。不肖は此飛雨蕭々たる静朝の感慨を認めて、諸友中最も熾烈なる大羅馬主義者内田君に送り以て憂国の情を訴えざるを得ざりしなり。ああ諸公。日本何ぞ独り史上永遠の覇ならむ。国運の盛んなるに驕りて隣邦の存亡亦実に爾が五十年前の危機たりし事を忘却して、慢態驕恣戒むる所を知らず、殆ど亡清の跡を追ふがごとくなるは何ぞや（同書 p47～48）」。

ついで、支那革命の混乱の中で暗殺された盟友・宋教仁への哀切な回想を踏まえつつ、転じて日本の革命への暗い期待を述べた一節はこうである。「ああ在天の靈よ。七年の歲月榮辱を共にし死生を契りし爾が唯一の友は碌々尚茲に在り。爾が頼らんとし頼るべからざりし日本は朝野尚酔夢酣にして、英露を討つて爾の山河を保全すべき大策を悟らず。天の賜ひし欧州戦乱の機を逆用して却つてその走狗となり、両国牆に鬩ぎて日支交渉の如き蝸牛角上の紛争を事とす。爾が生前の悲しみとし余の恥とせる所の者、今日悉く現実せられて其の極に達せり。遺去今一管の筆を揮つて巷に義を叫ぶ。講和政局を論叙せんとして図らずも爾が尽くるなきに恨を想ひ泣然として涙紙上に落つる者幾滴（p106）」。

友への懐旧は尽きることはない。まるで逝ける恋人への愛のルフランであるかのように北は嘆く。「長江流れて濁波海に入ること千万里。白鷗時に叫んで静寂死の如し。断腸の身を欄に倚せて千古の愁を包める浮雲を望み、天日の悲しむを仰ぐ。限りなき追憶は走馬灯の如く眼前に浮かびては消えつつ。満州の馬賊運動より帰りし彼の始めて来訪せし七年前のこと。刑事に追尾され、時に一飯の食を分ちし窮時のこと。……而して思いは廻りて幻の如く枕頭に立ちし亡霊の不可思議に返りつつ（p140）」。

『外史』からの引用の最後に、さきに武田泰淳『風媒花』の項で触れた革命における「殺の

呪文」の詩的な表現をあげる。張りつめたもの・昂揚したものを内部に潜めたその一節はこうである。「自由の樂土は専制の流血を以て洗はずんば清浄なる能わず。基督の愛といえども我は平和を来す者に非ず刃を出さんが為に来れりと宣布し、佛の宇宙大に満つる大慈悲は道を妨ぐる一切の者を粉碎せずんば止まず。觀世音首を回らせば則ち夜叉王。大海に溢るる慈悲の仏心を以て四億万民の自由を擁護扶植せんとする者、焉んぞ是等を残賊する暗黒時代の魔群を折伏せずして止むべけんや (p154)」。

ここに私が『外史』から引用した幾つかの節を「詩的」と見るか否かについては、多くの異見もありうることであろう。漢文調の文体それ自体の持つ韻律感、明治大正期の警世的な文章に特徴的に共通するやや激越で感傷的な表現特性、それらが北一輝の『支那革命外史』にも通底することはたしかである。だが、そういう一般的な共通項では括れない独自の「詩境」が、ここに存在するように私には思えてならない。私の理解では、「詩」とは激出しようとする感情を内的なリズムのうちに凝縮する美のきびしいフォルムにほかならない。多くの古典的な詩型で音韻や字数・行数などの制約があるのは、ともすれば無限定に迸らんとする感情・想念を美の形式に抑制しようとする「詩」の装置であろう。もちろん、近代詩、現代詩ではこの「形式」による抑制の装置は後退するが、それはいわば内在的な韻律の重視に移行し、この本質は変わらないと思われる。前述のように、『支那革命外史』での溢れ・こみあげんとする情念を抑制しようとする北の叙述は、一種独特の鋭い詩的なリズムを内在させている。

また、「詩」とは多かれ少なかれ、antagonism の所産であるように思われる。たとえば希望があり、その対極に失望や絶望が存在し、過去への回帰の想いの一方で未来への熾烈な幻想があり、優しさと苦悶とのほざまがあり、それらの葛藤・対立を均衡へ、美しい均衡へ向けて行こうとする言葉の営為—それが「詩」ではないか。だから、ある意味で「詩」は二重の「拒否」から生まれる。その一つは外部からの「拒否」、そこから生まれる閉ざされた唇よりの溜め息・声・叫びである。もう一つは自らの内部からの「拒否」、そこから生まれる失意・絶望・沈黙、それゆえの激しい表現への渴望である。私にとって、とくに『外史』における北一輝の一連の文章は、このような antagonism と「拒否」の基盤に立って誕生したように感じられる。さらにいえば、佐渡でのやや幼い恋愛とその失恋、「明星」に影響された短歌とその後の明治新体詩の色濃い長詩の連作、『国体論及び純正社会主義』をはじめとする天皇観の二重性、この書の発刊と発禁、中国革命への参加と中国よりの退去命令、『支那革命外史』の執筆と帰国、『日本改造法案大綱』の執筆、2.26 事件への関与と刑死等々、北の存在と駆け抜けたその生涯それ自体が、この antagonism と「拒否」で貫かれていた。すなわち、ある意味では北一輝それ自身が「詩的存在」であったのである。

### Ⅲ. 「イデオログ」としての北一輝

青春期の私にとって印象的ではあったが、今ではやや不確かな記憶によれば、「情緒は私を支配する、論理よりも強く」と伊藤整は述べた。前記の「詩人」としての北一輝像はとくに、この「情緒」の側面を照射したものである。だが、いうまでもないが、それだけであるならば北一輝は北一輝ではない。「論理」の側面でも、歴史・政治・社会・革命等々についての独自の・鋭いポレミックな理論構成、そして「あの理論の底を流れている、過激で無欲な、ある美しい精神主義の高い調子」（前出の利根川裕『宴』における叙述）が北には存在する。また、「私は、北一輝を予言者あるいは思想家として評価し、北一輝の中にあつたデモニッシュな国家改造の熱意が、ある冷厳な性格に支えられていたことを、いつも面白く思うのである」（同じく前出の三島由紀夫『北一輝論－「日本改造法案大綱」を中心として』における叙述）という指摘がある。

さらに、北のイデオロギーは当時の「革新的青年」の心と行動に如何に作用したか。その一端として、2.26 事件に実際に参加し刑死した磯部浅一による「日本改造法案」への傾倒ぶり、及びそれによって行動を激発された心的状況をあげてみる。その激しい傾倒ぶりは、「日本の道は日本改造法案以外にはない、絶対がない。日本がもしこれ以外の道を進むときには、それこそ日本の没落の時だ。……日本改造法案は一点一角一字一句ことごとく真理だ、歴史哲学の真理だ、日本国体の真表現だ、大乘仏教の政治的展開だ、余は法案のためには天子呼び来れども舟より下らずだ」「北一輝氏、先生は近代日本の生める唯一最大の偉人だ。……余が日本歴史中の人物で最も尊敬するは楠公だ、しかして明治以来の人物中においては北先生だ」「革命を量る尺度は日本改造法案だ」「法案はわが革命党のコーランだ、剣だけあってコーランのないマホメットはあなどるべしだ。同志諸君、コーランを忘却して何とする」などに示される<sup>(32)</sup>。

上の認識を踏まえ、ここでは北一輝における「論理」「イデオロギー」の特徴、そしてこれによって支那革命に参画し、日本改造の構図を描き、青年将校たちの実践行動を激発した「イデオログ（ひいてはアジテーター）」としての北一輝像に接近してみたい。

接近の視角は多様であろう。「右翼とも左翼ともつかぬ」二律背反にとらわれた存在が北一輝であるからには、そのイデオロギー把握の仕方も、ある種の矛盾と混沌を伴わざるを得ない。とはいえ、一応の整理として、ここでは次の3つの視角を考える。その第1は、多くのイデオログの行き着く一つの果てとしての「アジテーター」の視角である。第2は、北のイデオロギーないしイデオログにおける「独自性」の視角である。そして第3には、上とオーバーラップする点もあろうが、「ファシズムないし日本ファシズム一般のイデオロギー特性との比較」の視角である。とくにこの第3については、たとえば『日本ファシズムの源流』（前出、田中惣五

郎) や「超国家主義者<sup>(33)</sup>」としての北一輝像が広く存在するだけに、無視できない視角と思われる。

そこでまず、第1の「アジテーター」の視角をとりあげる。多くの場合、ある傑出した(または特徴的な)イデオログのイデオロギーは、当然に人々の思想や心情に強く働きかける(すなわち agitate する)。北の場合、その先行する若き日の典型的な行為は、もちろん、小論における『詩人としての北一輝』で前述した革命への激烈なオマージュの長詩～「佐渡中学生諸君に与う」の発表である。それについては、ここで再説はしない。つぎに『支那革命外史』の『序』でのいくつかの刺激的な叙述があげられる<sup>(34)</sup>。

もともと、この書は「故袁世凱が帝政計画を遂行し日本の施策再び三たび謬妄を重ねんとしつつあるを見て、其年の十一月執筆の傍より印刷しつつ時の権力執行の地位にある人々に示した者である」。したがって、「本書を読まる々方は文調の旧式であり、態度の諫諍的であることを怪しむであらう。……日蓮といえども元寇襲来を警告せる立正安国論は彼自身の文調でなく又時の権力者に対する諫諍的態度であった。……不肖は日蓮に非ず又日蓮の奴隷に非ず。切に読者諸公の間より膽甕の如き相模太郎の出現を待望止まざる者である」。「ああ黒い血潮を吐いて前後任地にたおれた公等(当時の支那公使山座圓次郎等のこと 井上注記)の道義的対支策を継承すべき第二の公等は今何処にあるのだ」。すなわち、『支那革命外史』は、もともと日本の支那を中心とする対外政策及びそれと密接に関連する日本自体の改造・革新に関しての日本の「諸公」に対する熱烈な「諫諍」～アジテーションの書物という一面を有していた。

なお、『外史』の巻末に「ヴェルサイユ会議に対する最高判決」と題する満川亀太郎宛の書簡(大正8年6月上海より 井上)が付されているが、そのなかに「只一事承知すべきことは現時支那を掩有せんとしつつある英米的勢力を打破する者は支那本来の徹底的革命家の一団であって、日本が真個生死榮辱を共にするに足る新興支那の国柱的人物である。……芳書には日本の外交革命に絶望したかの如く見えますが大丈夫です。数十人の国柱的同志あらば天下の事大抵は成るものと御決意下さい<sup>(35)</sup>」。この一節もまた後年の「青年将校」たちの「蹶起」を促すアジテーションの一角を形成しているかに見える。

さて北の3つの主要著作のうち、『日本改造法案大綱』が「日本改造」の諸方策を激しく説くものであるからには、もっとも煽動的であることはいうまでもない。北自身によってこの著作の執筆動機は以下のように述べられる。「さうだ、日本に帰ろう。日本の魂のドン底から覆へして日本自らの革命に当ろう。其れには雑多に存在し行動して居る本国の革命的指導者にだけなりとも、革命帝国の骨格構成の略図をでも提供する必要がある。然り、全亜細亜の七億万人を防衛すべき“最後の封建城郭”は太平洋岸の群島に築かるべき革命大帝国であると。斯くして此の法案を起草し始めたのである<sup>(36)</sup>」。

このようにして、磯部浅一のいう「革命党のコーラン」は大正8年8月、まず原型たる『国家改造案原理大綱』として上海で執筆されたが、帰国後、第1回に猶存社同人の謄写版による秘密出版として頒布され（タイトル『国家改造案原理大綱』9年1月発禁）、第2回に大正12年5月に多くの削除を伴いながら改造社から刊行され（同『日本改造法案大綱』）、第3回に15年2月初版、5月再版として西田税の編集兼発行で刊行される（同『日本改造法案大綱及び補遺』、再版では極めて多くの伏せ字）。このような執筆と刊行の経緯自体が、この書の危険で暗黒の agitating な特性を物語っている。

そこで以下に、伏せ字や削除が比較的少ない、原型としての『国家改造案原理大綱』に拠って、北のアジテーター的な資質を端的に示すと思われる部分を若干摘出してみる。

最初に「緒言」から、日本独自の革新を通じて世界での覇権追求をめざす一節を引用する。すなわち、「欧米革命論ノ權威等悉ク其淺薄皮相ノ哲学ニ立脚シテ終ニ劍ノ福音ヲ悟得スル能ハサル時、高遠ナル亜細亜文明ノ希臘ハ率先其レ自ラノ精神ニ築カレタル国家改造ヲ終ルト共ニ亜細亜聯盟ノ義旗ヲ翻シテ真個到来スベキ世界聯邦ノ牛耳ヲ把リ、以テ四海同胞皆是僂子ノ天道ヲ宣布シテ東西ニ其ノ範ヲ垂ルヘシ<sup>(37)</sup>」と。

また、「巻一 国民ノ天皇」で、「天皇ノ原義—天皇ハ国民ノ総代表タリ、国家ノ根柱タルノ原義ヲ明カニス」に関しての注記はこうである。「此時（明治維新を指す 井上）ヨリノ天皇ハ純然タル政治的中心ノ意義ヲ有シ、此国民運動ノ指揮者タリシ以來現代民主国ノ総代表トシテ国家ヲ代表スル者ナリ……国家ノ元首ガ売名的多弁ヲ弄シ下級俳優ノ如キ身振ヲ晒シテ当選ヲ争フ制度ハ（例えば米国の大統領選挙制度 井上）、沈黙ハ金ナリヲ信条トシ謙遜ハ美德ナリヲ教養セラレタル日本民族ニ取リテハ一ニ奇異ナル風俗トシテ傍觀スレバ足ル（同書 p223）」。上の「緒言」とあわせ、欧米流のデモクラシーや多数決原理への嫌悪と選良主義への傾斜が煽動的に強調される。

「巻八 国家ノ権利」において、北は「開戦ノ積極的権利—国家ハ自己防衛ノ外ニ不義ノ強力ニ抑圧サル他ノ国家又ハ民族ノ為メニ戦争ヲ開始スルノ権利ヲ有ス」と規定しているが、その論拠を激しい気迫を以って次のように注記する。「正義トハ利己ト利己トノ間ヲ劃定セントスル者。国家内ノ階級争闘ガ此ノ劃定線ノ正義ニ反シタルガ為ニ争ハルル如ク国際間ノ開戦ガ正義ナル場合ハ現状ノ不義ナル劃定線ヲ変改シテ正義ニ劃定セントスル者ナリ。英国ハ全世界ニ跨ル大富豪ニシテ露国ハ地球北半ノ大地主ナリ。散粟ノ島嶼ヲ劃定線トシテ国際間ノ無産者ノ地位ニアル日本ハ正義ノ名ニ於テ彼等ノ独占ヨリ奪取スル開戦ノ権利ナキカ。国内ニ於ル無産階級ノ闘争ヲ認容シツツ独り国際的無産者ノ戦争ヲ侵略主義ナリ軍国主義ナリト考ル欧米社会主義ハ根本思想ノ自己矛盾ナリ（p273）」。北一流のこのポレミックな主張が、やがて大東亜戦争の日本側からの一つのロジックに転化したことはいうまでもない。さらに、この巻の終り

に「憂国の危機感」を表白して「改造」を呼びかける。「日本ハ今ヤ皆無カ全部カノ断崖ニ立テリ。六千万同胞我ガ天皇ヲ抱キテ国ヲ枕ニ倒レル大決意ヲ以テ根本的改造ヲ決行セズンバ内崩外圧一時ニ殺到シテ二千五百年ノ史巻実ニ大正八年ヲ以テ閉ツベシ。国家改造ノ急迫ハ維新革命ニモ優レリ (p278)」。

こうした「論理」の終着点としての、大東亜戦争を予言するかのごとき挑戦的な・高い調子の「結言」の一部はこうである。「天行健ナリ。国ハ興リ、国ハ亡ブ。欧亜大陸ガ数百年以上上ジンキス汗オゴタイ汗等蒙古民族ノ支配ヲ許ササリシ如ク、アングロサクソン族ヲシテ地球ニ闊歩セシムル尚幾年カアル。……日本国民ハ速カニ此ノ国家改造案原理大綱ニ基キテ国家ノ政治的経済的組織ヲ改造シ以テ来ルベキ史上未曾有ノ国難ニ面スベシ。… …戦ナキ平和ハ天国ノ道ニ非ズ (p280~281)」。まさに『大綱』も「緒言」から「結言」に至るまでを一貫して、北一輝の昂揚した心理と表現に満ち満ちたアジェーションの書といえよう。三島由紀夫のいうように「北一輝は革命家として、あるいはまた煽動家として抜群であった<sup>(38)</sup>」のである。

ついで、第2のイデオロギーないしイデオログにおける「独自性」の視角からみる。この点については、先にも触れたことだが、その「右翼とも左翼ともつかぬ」一種の混沌、一種の二律背反がまず際立っているであろう。それは北自身の「イデオロギー」のなかで、どう表現されているか。

『国家改造案原理大綱』が形を変えて大正12年5月に『日本改造法案大綱』として再刊された折の冒頭の「凡例」(北執筆)で、以下の叙述がある。すなわち、「日本改造法案ノ起草者ハ当然ニ革命的大帝国建設ノ一実行者タラザルヲ得ズ。従テ其レガ左傾スルニセヨ右傾スルニセヨ前世紀的頭脳ヨリスル是非善悪ニ対シテ応答ヲ免除サレンコトヲ期ス。恐ラクハ閑暇ナシ<sup>(39)</sup>」。北は、「十有余年間の支那革命に興かれる生活を一抛して日本に帰る決意を固め<sup>(40)</sup>」「上海の一病室に横はって起草するまでに四十幾日かの断食」をして「執筆に一箇月」を費やして稿を終わったのだが、この段階で『大綱』における「左傾」「右傾」の相反するイデオロギー要素の存在を意識していたのである。更にいう。「“国体論及び純正社会主義”は当時の印刷で一千頁程の者であり且つ二十年前の禁止本であるが故に、一読を希望することは誠に無理であるが、その機会を有する諸子は“国体の解説”の部分だけの理解を願ひたい。右傾とか左傾とか相争ふことの多くは日本人自らが日本の国体を正當に理解して居らぬからであると思ふ。……坦々たる長安の大道を何が故に泥酔者の如く右傾し左傾して歩すのか」と。後でも触れるが、北にとってその思索の出発点である『国体論及び純正社会主義』の時期から、すでに自分の思想における「右と左」の混交や対立が意識されていたかのようなのである。

『大綱』に即して、「右傾・左傾」の思想を例示的にみよう(以下、同書p219~281による)。「巻

一 「国民ノ天皇」の最初に「天皇ハ全日本国民ト共ニ国家改造ノ根基ヲ定メンガ為メニ天皇大権ノ発動ニヨリテ三年間憲法ヲ停止シ兩院ヲ解散シテ全国ニ戒厳令ヲ布ク」。そして、この天皇とは「国民ノ総代表タリ、国家ノ根柱タルノ原理主義」に立脚している。すなわち、革命は革命さるべき旧体制アンシャン・レジームの頂点に位置する天皇の主導するクーデタによって遂行され、天皇は新体制の「総代表」「根柱」として存続するという奇怪なイデオロギー。これこそが、左右混交・二律背反の北の政治思想、革命・改造戦略の凝縮ではないか。しかも、それは現実に2.26事件の「青年将校」たちの行動原理の根底に存在し、であるが故に皮肉にもこの行動は、旧体制の頂点たる昭和天皇によって激しく忌避され、「叛乱」としての終焉を迎えざるを得なかった。

加えて、この天皇主導の革命理論を補強する歴史認識として、北は「此ノ理義ヲ明ラカニセンガ為ニ神武国祖ノ創業明治大帝ノ革命ニ即リテ宮中ノ一新ヲ図リ」とする。否定しようとしても否定しきれぬ天皇へのある種の憎悪愛と、国家の一機関たる天皇の革命の用具への転化の意思。この発想、すなわち「天皇を抱く革命」を通じて「革命的大帝国の建設」という発想は、さきに「アジテーターの視角」で述べた「国家ノ権利」における民族ないし国家の維持・存続・発展のための、とくにアングロ・サクソンに対する戦争開始の強烈な一種のミッション・アイデアの表明とあわせて、北一輝イデオロギーの核心的な部分を形成するように思われる。なお、ここでつけ加えられるのは、このような「革命的天皇」として北の脳裏に在る色濃い存在は「明治大帝」である。たとえば「革命の鮮血舞台に演舞すべく天より遣わさるるほどの者の思想行動には、国境と時代を一貫して枉ぐべからざる或る者がある。大西郷のしたことはレニン君の為す所であり、大奈翁の行ったところは明治大帝の踏める道である<sup>(41)</sup>」。北にとって天皇とは、皇統譜的にはそれぞれの背景を有する歴史的な存在であり、明治維新以降には国家組織上の「純然タル政治的中心ノ意義ヲ有シ、此国民運動ノ指揮者タリシ以来現代民主国ノ総代トシテ国家ヲ代表スル者<sup>(42)</sup>」であり、個別的には「現天皇（明治天皇 井上注記）が万世一系中天智とのみ比肩すべき卓越せる大帝なることは論なし<sup>(43)</sup>」と、明治大帝への偏愛を否定できないであろう。

北のイデオロギーにおける「右と左」の意識的な並存は、原点としての『国体論及び純正社会主義』に萌芽がある。私の直感的な印象では、「国体」と「社会主義」とをこの大部の著書のタイトルに並列するという感性・発想それ自体が、彼の「右傾・左傾」並存の始発点を形成しているように思えてならない。この書は「社会主義の経済的正義」「社会主義の倫理的理想」「生物進化論と社会哲学」「所謂国体論の復古的革命主義」「社会主義の啓蒙運動」の5編構成であるが、なかでも第4編が「著者の最も心血を傾注したる所」であり、「日本の社会主義者に取りては“社会主義は国体に抵触するや否や”の問題にて已に重荷なり<sup>(44)</sup>」なのである。すなわ

ち、「右と左」の相剋は北の政治的思索の上で最初からの重圧であり、だからこそ対決・克服すべきクリティカルな主題であった。

北はまず、当時支配的な「国体論」における万世一系の伝統的な「天皇」それ自体の絶対的権威を否定して、維新以降の新たな存在意義を強調する。「“国体論”の神輿中に安置して、触るものは不敬渎なりと声言せられつつあるは、実は天皇に非らずして彼等山僧等の迷信によりて恣に作りし土偶なればなり。……捏造せる土人部落の土偶なるなればなり(同書 p210)。「実に日本の国体は数千年間同一に非らず、日本の天皇は古今不変の者にあらざるなり(p218)。「現天皇は維新革命の民主主義の大首領として英雄の如く活動したりき。……その天皇とは国家の所有者たる家長と云ふ意味の古代の内容にあらずして、国家の特権ある一分子、美濃部博士の所謂広義の国民なり(p354)」。そして、この「新たな天皇」への価値判断あるいは革新のための利用価値に関して、「民主的革命の大首領たりし現天皇は固より歴史以来の事実には照らして日本今後の天皇が高貴なる愛国心を喪失すと推論するが如きは、皇室典範に規定されたる摂政を置くべき狂疾等の場合より外想像の余地なし(p421)」と、いささか強引な論断を踏まえ、「日本の天皇は国家の生存進化の目的の為に発生し継続しつつある機関なり(p425)」と位置づける。ここで天皇は「国家の生存進化～絶えざる革新・改造」の可能性としての担い手に転化し、かくして「“社会民主主義と日本天皇と両立するや否や”と言ふ最も恐るべしとさるる問題(p418)」は、「右も左も」弁別し難い「坦々たる長安の大道」に入っていく。

さて、もう一点「独自の」イデオロギーとして逸することのできないのは、「殺」あるいは「劔」への執着であろう。この点については、武田泰淳の『風媒花』における細谷源之助＝北一輝の内心構造に触れて、また『支那革命外史』における「殺の呪文」の詩的な表現に触れて前述した。ここで、北の思想展開の軌跡を探るという観点から、ふたたびの接近を試みたい。

23歳の時に自費出版した『国体論及び純正社会主義』の第5編「社会主義の啓蒙運動」のなかで、高らかに彼は表明する。「おお来るべき第二の維新革命よ。再び第二の貴族諸侯に対して階級闘争を開始せざるべからず。……正義の神は衡(秤の意味 井上)と共に劔を有す。……劔の重量に従ひて衡は傾き正義の神は其の傾斜の上に判決を下す。……維新革命の劔によりて貴族国を顛覆し以て平等の権利に衡を保ちたる如く、社会民主主義の現行法の下に小作人と賃金労働者とが劔の閃きに驚き起て団結の強力を作るとき、茲に経済的貴族国は顛覆して経済的平等の上に正義の神は現はる(p394～395)」。もちろん、革命におけるゲバルトの容認は北一輝だけの思想ではないが、「天皇を抱く革命」を通じて「革命的大帝国の建設」を希求するなかでの「殺」「劔」への執着は、やはり独自の観念と思われる。

そして、この観念は維持され続ける。一貫不惑のイデオログであることを強く意識して、彼は自らのイデオロギー全般について、「理論として二十三歳の青年の主張論辯したことも、實

行者として隣国に多少の足跡を印したことも、而して此の改造法案に表はれたことも、二十年間嘗て大本根柢の義に於て一点一画の訂正なしという根本事の諒解を欲する<sup>(45)</sup>とする。この流れのなかで「實行者として隣国に」の記述は、いうまでもなく『支那革命外史』での体験であり、そこでの「殺」「劔」については先述した。

では、『大綱』ではどのように述べられているか。それにはまず、前記と重複するが、大正8年の第1回公刊時の「緒言」がある。すなわち、「欧米革命論ノ権威等悉ク其浅薄皮相ノ哲学ニ立脚シテ終ニ劔ノ福音ヲ悟得スル能ハサル時、高遠ナル亜細亜文明ノ希臘ハ率先其レ自ラノ精神ニ築カレタル国家改造ヲ終ルト共ニ亜細亜聯盟ノ義旗ヲ翻シテ真個到来スベキ世界聯邦ノ牛耳ヲ把リ……<sup>(46)</sup>」。

また、『大綱』の「巻八 国家ノ権利」で「徴兵制の維持—国家ハ国際間ニ於ケル国家ノ生存及ヒ發達ノ権利トシテ現時ノ徴兵制ヲ永久ニ亘リテ維持ス」とするが、この項に関連して独特の「殺」観を示す注記がある。それは「或ル理想又ハ或ル信仰ニ基キテ徴兵ヲ拒否セントスル者」を想定し、それへの反論という形で論述されているが、なかで「同シキ神教ニ於テマホメットハ刃ヲ出サンガ為メニ来レルヲ明言シテ“殺スベシ”ト教ユルニ非スヤ。……神ハ全智ニシテ全能ナルガ故ニ古人ノアノ洪水ヲ以テ大殺戮ヲナシ……日本国民ノ神ハクエーカー教徒ノ神ニ対シテ弥陀ノ利劔ヲ揮フベキノミ<sup>(47)</sup>」という表現がある。さきに“詩人”としての北一輝”の項でも引用したように、北にとっては、「殺」は至高の存在あるいは至高の使命のためには聖なる「大殺戮」ともなり得るのである。この点において、後に別章を設けて私がとりあげる“魔王”ないし「呪的存在」としての北一輝”の風貌が、すでに仄見えてくるであろう。

第3に、北のイデオロギーと「ファシズムないし日本ファシズムのイデオロギー特性との比較」の視角からみる。北をファシストしたがってそのイデオロギーをファシズムとする見解は、これまでに一般的であった。代表的な見解を示すと、北が『日本ファシズムの源流』（前出、田中惣五郎）に位置するとか、その主著『大綱』が「あまりにも有名な日本ファシズムの聖典」（前出、橋川文三）であるとか、「日本におけるファシズム運動の起点を1919年に求めたのは、国家改造運動の源流である猶存社がこの年に設立されたからである。猶存社が日本国家主義運動史上劃期的な地位を占めるのは、なによりも北一輝の加盟と『日本改造法案大綱』を理論的支柱としたことによる<sup>(48)</sup>」などである。それだけに、“イデオログ”としての北一輝”を考えるには、この視角を逸することはできないであろう。

では、ファシズムないし日本ファシズムの一般的なイデオロギー特性とはどのようなものであるのか。その答はあまり簡単なものではないが、ここでは、よく知られた丸山真男の規定に

即して考えることにする。丸山によれば<sup>(49)</sup>、日本ファシズムの「イデオロギーにおける特質」はつぎの3点にある。すなわち、①家族主義的傾向（とくに国家構成の原理としての家族主義の強調。君臣一家、忠孝一致、国民の「総本家」としての皇室、その頂点に位置する天皇、国体等）、②農本主義思想の優位（商工業本位の資本主義的政策から農本主義の産業立国政策への重点移行。都市偏重から農村振興へ、国家・軍隊の基盤としての農村、日本ファシズム形成の重要な契機としての農業恐慌・農村窮乏等）、③大亜細亜主義に基づくアジア諸民族の開放の思想（自由民権運動時代からの思想としての欧米による植民地支配よりのアジア開放、アジアの盟主としての日本等）。

また、同じく丸山によると「日本ファシズム運動も世界に共通したファシズム・イデオロギーの要素というものは当然もっているからであります。例えば①個人主義的自由主義的世界観を排すとか、②或は自由主義の政治的表現であるところの議会政治に反対すとか、③対外膨張の主張、軍備拡充や戦争に対する賛美的傾向、④民族的神話や国粹主義の強調、⑤全体主義に基づく階級闘争の排斥、特にマルクス主義に対する闘争というようなモメントーこれらはいずれも独逸や伊太利のファシズムと共通したイデオロギーであります」（マル数字の区分は井上による）。

以下、この丸山の規定に即して、北一輝のイデオロギーとファシズムないし日本ファシズム一般のイデオロギーとの近接あるいは切断関係を吟味してみよう。その場合、北のイデオロギーを把握する素材としては、彼の革命・改造の具体的な行動ないし政策構図を端的に表明し、主要3部作の最終段階に位置する『大綱』を中心的な基準とする。

まず、日本ファシズム・イデオロギーの「特質」との類縁関係のうち、①の「家族主義的傾向」については、北は明らかに否定的である。「国体」への挑戦的な否認の意思は、すでに『国体論及び純正社会主義』における核心的な主題であったし、この点は前述した。『大綱』の「巻一 国民ノ天皇」から若干つけ加えると、「此時（明治維新を指す 井上）ヨリノ天皇ハ純然タル政治的中心ノ意義ヲ有シ、此国民運動ノ指揮者タリシ以来現代民主国ノ総代表トシテ国家ヲ代表スル者ナリ。……此歴史ト現代トヲ理解セザル頑迷国体論者ト欧米崇拜者トノ争闘ハ実ニ非常ナル不祥ヲ天皇ト国民トノ間ニ爆發セシムル者ナリ。国体ヲ理解セズシテ国体ヲ誇ルハ決シテ国民的自尊心ニ非ズ<sup>(50)</sup>」。ここに、家族主義的な国体観念はむしろ論難の対象である。

②の「農本主義思想の優位」も北のイデオロギーとはほとんど無縁である。こうした発想は主要3部作及び実際の行動のいずれにも登場してこないし、『大綱』の改造構想のうちの「巻三 土地処分三則」でも特に農業優先ないし農業振興の表明はない。同時代の有力な「右翼」である権藤成卿や橘孝三郎の「農本イデオロギー」に対して、「最もそうした色彩がうすく、一番中央集権的な国家統制を徹底させているのは恐らく北一輝の“日本改造法案”であります<sup>(51)</sup>」

という評価は一般的である。

反面、③の「大亜細亜主義に基づくアジア諸民族の開放の思想」については、かなり色濃く存在するようである。別の部分でも引用したが、まず『大綱』の「緒言」で「高遠ナル亜細亜文明ノ希臘ハ率先其レ自ラノ精神ニ築カレタル国家改造ヲ終ルト共ニ亜細亜聯盟ノ義旗ヲ翻シテ真個到来スベキ世界聯邦ノ牛耳ヲ把リ、以テ四海同胞皆是仏子ノ天道ヲ宣布シテ東西ニ其ノ範ヲ垂ルヘシ（北一輝 同上書 p220）」とする。

また「巻七 朝鮮其他現在及ビ将来ノ領土ノ改造方針」において、開放さるべきアジアの範囲はさらに具体的に拡散する。これまでの欧米大国によるアジア植民地支配は打倒されねばならない。それは、大日本帝国に課せられた天職である。その基本的な前提としても「国家改造」が必須なのだ。「豪州ニ印度人種支那民族ヲ迎へ、極東西比利亚ニ支那朝鮮民族ヲ迎へテ先住ノ白人種トヲ統一シ、以テ東西文明ノ融合ヲ支配シ得ル者地球上只一ノ大日本帝国アルノミ。従テ此改造組織ヲ其等ノ領土ニ施行シテ主権国民自ラ私利横暴ヲ制スルト共ニ先住ノ白人富豪ヲ一掃シテ世界同胞ノ為ニ真個樂園ノ根基ヲ築キ置クコトガ必要ナリ（同 p266）」。

このようにしてみると、北のイデオロギーは、少なくとも丸山が古典的に規定した「日本ファシズム・イデオロギーの特質」からは一定の距離をおく独自のものといえる。ついで、同じく丸山の指摘する独伊などを含めたファシズム・イデオロギー一般に共通する5つの要素と比較してみよう。

ここでの①の「個人主義的自由主義的世界観の排斥」についてはどうか。この点についての北の見方はかならずしも単線的ではない。すなわち、「巻一 国民ノ天皇」において、「天皇ハ国民ノ総代表タリ、国家ノ根柱タル」と規定したことについての注記で、米国の大統領選挙システムを「米人ノデモクラシートハ社会ハ個人ノ自由意思ニヨル自由契約ニ成ルト云ヒシ当時ノ幼稚極マル時代思想ニヨリテ各欧州本国ヨリ離脱シタル個々人ガ村落的結合ヲナシテ国ヲ建テタル者ナリ。其投票神権説ハ当時ノ帝王神権説ヲ反対方面ヨリ表現シタル低能哲学ナリ（p223）」と罵倒する。他方で、「巻二 私有財産限度」の項の注記では、国民1人あたりの私有財産を300万円に限定するものの、「個人ノ自由ナル活動又ハ享楽ハ之レヲ其私有財産ニ求メサルヘカラス。貧富ヲ無視シタル劃一的平等ヲ考フルコトハ誠ニ社会万能説ニ出発スルモノニシテ、或者ハ此非難ニ対抗センカ為ニ個人ノ名譽的不平等ヲ認ムル制度ヲ以テセント云フモコハ価値ナキ別問題ナリ（p228）」という見解である。国家あるいは政権の基本構造形成に関しては個人主義・自由主義への不信、社会経済の原理あるいは基盤に関しては肯定的、ここでも北のイデオロギーの多元性がうかがわれる。

②の「自由主義の政治的表現としての議会政治への反対」について。『大綱』は「国家改造」のためのマニフェストであるから、「巻一 国民ノ天皇」の冒頭では「憲法停止一天皇ハ全日本

国民ト共ニ国家改造ノ根基ヲ定メンガ為メニ天皇大権ノ発動ニヨリテ三年間憲法ヲ停止シ兩院ヲ解散シ全国ニ戒厳令ヲ布ク (p221)」という。国家改造の初期段階では議会政治は緊急措置としての「国家改造議会」に移行するが、「戒厳令施行中普通選挙ニ依ル国家改造議会ヲ召集シ改造ヲ協議セシム。天皇ハ第三期改造議会マデニ憲法改正案ヲ提出シテ改正憲法ノ発布ト同時ニ改造議会ヲ解散」する。また、ここでの注記で注目すべきは、改造議会といえども普通選挙をベースとしたことにつき「コレ国民ガ本体ニシテ天皇ガ號令者ナル所以」としていることであろう (下線は井上)。

さらに「兩院ヲ解散スルノ必要ハ其レニ據ル貴族ト富豪階級ガ此改造決行ニ於テ天皇及国民ト兩立セサルヲ以テナリ (p222)」とし、後段の政治機構構想では、華族制度の廃止、衆議院 (下院) と審議院 (上院、その議員は「各種ノ勲功者間ノ互選及勅選ニヨル」) の兩院制、衆議院での「二十五歳以上ノ男子」の「平等普通」の選挙権・被選挙権の設定などが提起され、さらに「国民自由ノ恢復」として「従来国民ノ自由ヲ拘束シテ憲法ノ精神ヲ毀損セル諸法律ヲ廃止ス。文官任用令。治安警察法。新聞紙条例。出版法等」も盛り込まれる (p222~225)。かくして議会制度それ自体への否定的見解は殆どない。『国体論及び純正社会主義』において、自らを「社会民主主義者」とした若き日の北一輝のイデオロギーはなお持続されているようである。

つぎは③の「対外膨張の主張、軍備拡充や戦争に対する賛美的傾向」についてだが、この点については「アジテーター」視角での「巻八 国家ノ権利」、「独自性」視角での「殺」ないし「劔」のイデオロギーの項目において、すでに言及したように強く sympathetic である。それは、「巻八 国家ノ権利」の随所に表われているが、これまでの引用との重複を避けつつ、その一部分を示してみよう。「日本ノ対外行動ハ取ルベカラサル者ヨリ寸土ヲ得サルト共ニ天日照覧ノ下苟モ奪フバクンバ全地球ヲモ大ナリトセサルベキ大丈夫ノ健脚ニ立ツベシ。……要スルニ日本ハ日本海朝鮮支那ノ確定的安全ノ為メニ則チ日露戦争ノ結論ノ為メニ極東西比利亞ヲ領有スベク露西亜ニ対スル大陸軍ヲ欠クベカラズ。而テ印度独立ノ援護支那保全ノ確保及ビ日本ノ南方領土ヲ取得スベキ運命ノ三大国是ニ於テ英国ト絶対的ニ兩立セザルガ故ニ実ニ大海軍ヲ急務トス (p277)」。そして、一種昂然たる語調で『大綱』の「結言」は述べる。「英国ヲ破リテ土耳其ヲ復活セシメ、印度ヲ独立セシメ、支那ヲ自立セシメタル後ハ日本ノ旭日旗ガ全人類ニ日ノ光ヲ興フベシ。世界各地ニ豫言サレツツアル基督ノ再現トハ實ニマホメットノ形ヲ以テスル日本民族ノ經典ト劔ナリ。……戦ナキ平和ハ天国ノ道ニ非ズ (p281)」と。

橋川文三によれば、「革命者北の思想のうち、いわゆる日本の右翼者を随喜せしめるものはその“劔の福音”の高唱であり、いわゆる左翼者を憤らせ、冷笑せしむるものもまたその戦争神聖視の観点であろう。そしてまた、北の思想を“超”と形容すべき様相をもっとも端的にあらわしているのも、そのほとんど宗教的使命感と結びついた戦争聖化の見地にほかなるまい<sup>(52)</sup>」

と評価される。繰り返しになるが、北一輝のイデオロギーの独自性の一つが「殺」「劔」にあるからには、これは必然の道程なのである。

④の「民族的神話や国粋主義の強調」についてはどうか。これまでもみたような「高遠ナル亜細亜文明ノ希臘」、「東西文明ノ融合ヲ支配シ得ル者地球上只一ノ大日本帝国アルノミ」、さらに新たにつけ加えるならば『大綱』の「結言」のまさに最終の一節「書中国際聯盟ノ俗称ヲ用ヒズシテ“世界聯邦”ト云ヒ、聯邦ノ盟主タリ覇府ヲ築クベキ不可欠ノ地点ヲ指示スルヲ避ケタリ。龍ヲ画イテ晴ヲ点セザル者。只風雲怒濤日本民族ノ昇天スル時我ガ神ノ寶劔遥カニ西天ノ一角ヲ指スベシ (p281)」などが確かに存在する。これをもって「国粋主義」あるいは「超国家主義」の主張とすれば、それはそのとおりであるが、これらの叙述はむしろ「改造・革命」を国内だけでなく、アジアひいては世界にまで拡張しようという日本の「天職」～使命観の表明であることに注意したい。

また、「民族的神話」に関する北の態度は、かなり理性的であって、時として「神話」に対する揶揄的な姿勢もあらわれる。その始発的な例示をあげると、『国体論及び純正社会主義』において、「見よ。神道は何處に日本国は天照大神の一人より膨張せる者なりと云へる。……天照大神を以て神武一家の征服者の直系の祖先なりとは云ひ得べし。神武より先に移住せる日本民族、および後に來たれる民族、又天照時代に已に八百萬神と称せられたる多くの人口、及び歴史上の無数の帰化被征服者の他種族の繁殖せる子孫たる今日の日本民族とは係わりなきことなり。……日本民族のみ伊諾那岐伊册那美の二人より産れたる特別の神裔なりと論ぜざるべからず<sup>(53)</sup>」という記述がある。

さらに、当時としては大胆不敵の極ともいべき表現も見逃せない。『大綱』の「卷七 朝鮮其他現在及び将来ノ領土ノ改造方針」の一節をみる。「既ニ王朝貴族ニ朝鮮人ノ血液ガ多量ナリト云フコトハ實ニ其ノ貴族ノ血液ガ皇室ニ入り得ルヘキ特権階級タリシ点ニ於テ日本ノ元首其ノ者ガ朝鮮人ト没交渉ニ非ズト云フコトナリ (p260)」。ここでは、この時期の、ほとんどの日本国民の思念のなかにあった民族的神話としての万世一系の醇乎たる日本天皇の系譜は大きな疑問の中に投げ込まれているのではないか。既存の強固な支配体制への反逆が「革命」の本質であるならば、北一輝とはまことに本質的に「革命家」といわねばならない。

もう一つ指摘する。それは「卷六 国民ノ生活権利」のうち「教育ノ権利」に関しての「英語ヲ廢シテ国際語 (エスペラント) ヲ課シ第二国語トナス (p251)」の規定案である。この項目に注記して、「而テ欧米ノ革命團體ハ大戦ノ遥カニ以前此レヲ以テ国際語トセント決議セシホドノ者。……五十年ノ後ニハ国民全部ガ自ラ国際語ヲ第一国語トシテ使用スルニ至ルベク、今日ノ日本語ハ特殊ノ研究者ニトリテ梵語ラテン語ノ取扱ヲ受クベシ (p253)」と。文化や教育さらには知的な領域のオーバーオールな基盤としての「言語」に関して、これはそれこそ「革命的な」

提言であろう。これまで見たように、北のイデオロギーにおいて、「民族的神話」や、その延長としての同族偏愛的な排外主義の影はあまり見当たらない。

さて、ここでの終わりにファシズム・イデオロギー要素の⑤である「全体主義に基づく階級闘争の排斥、特にマルクス主義に対する闘争」についての吟味に移る。まず、基本的に北は「階級闘争を排斥」していない。それは彼の国家改造の典範たる『大綱』の「緒言」における「階級闘争ニヨル社会進化ハ敢テ之ヲ否マズ (p220)」の明言で確認できる。だが、北にとっての「階級闘争」とは如何なるものであったのか。それは、これまでに見た「北的思想」のほとんどと同様に、やや独自であった。北の思索の出発点たる『国体論及び純正社会主義』では「凡ての階級闘争とは運動の本体が下層階級に在りと云ふことにして闘争の結果は模倣と同化とによりて下層階級の上層に進化して上層階級の拡張することに在り。……更に換言すれば、社会が其の進化に於て社会の区分を区劃して漸次に進化せしむる結果社会の全部分が終に今日の上層、否固よりはれ以上に進化するに至ると云ふことなり<sup>(54)</sup>」であり、この議論は「無階級」社会が到来しない限り、一種の「永久革命」論に結びつく可能性に留意すべきであろう。

もう一つ、すでに小論の「アジテーターの視角」でも触れたところだが、北において「国内の階級闘争」と「国際的な階級闘争」とはほとんど等号で結ばれ、そしてその思想は③の「対外膨張の主張」の論理的な基盤を形成する。前の引用との重複を避けて、「卷八 国家ノ権利」から一部分を示すと以下のようなものである。「国内ノ無産階級ガ組織結合ヲナシテカノ解決ヲ準備シ又ハ流血ニ訴テ不正義ナル現状ヲ打破スルコトガ彼等ニ是認セラルハナラバ国際的無産者タル日本ガ力ノ組織的結合タル陸海軍ヲ充実シ、更ニ戦闘開始ニ訴テ国際的劃定線ノ不正義ヲ匡スコト又無条件ニ是認セラルベシ (p273)」。とするならば、ここでも国際的な有産国家と無産国家との格差が存続する限り、絶えざる国家間闘争＝「永久革命」は不可避のこととなる。かくして私の理解では、“「文学」に登場する北一輝”の項で述べた、北の「能動的な・あるいは過激な・行動的なニヒリズム」の存在をここでも想起せざるを得ない。

こうした流れの中で、「マルクス主義への反発」はあまり認められない。「階級闘争の原理が欧州に於てカール・マルクスに至りて漸く発見せられたる<sup>(55)</sup>」ことは認識し、「カール・マルクスの“資本論”がすこぶる遠き以前の智識なるがために其の枝葉の点に於いて無数の非難を被る餘地ありと謂えども、“資本は略奪の蓄積なり”といふ大原則は引力説の如く不動の真理なり<sup>(56)</sup>」とする。有産者ないし有産国家の「略奪の蓄積」に対する無産者ないし無産国家の「階級闘争」の積極的な是認は、特に若き日の北の「社会民主主義」思想の根底にあったと思われる。だが後年、革命の行動原理たる『大綱』の段階ではマルキシズムへの一定の留保の認識が前面に登場する。その「結言」の冒頭にいわく、「マルクストクロポトキントヲ墨守スル者ハ革命論ニ於テ羅馬法皇ヲ奉戴セントスル自己矛盾ナリ。英米ノ自由主義独逸ノ国家主義ガ各ソノ

民族思想ノ結ベル果実ナル如ク、独人タルマルクスノ社会主義露人タルクロボトキンノ共產主義ガ幾多ノ相異杆格セル理論ヲ以テ存立スルコトハ各其ノ民族思想ノ開ケル花ナリ。其ノ価値ノ相対的ノ者ニシテ絶対的ニ非ルハ勿論ノ事 (p279)」。日本には日本の、北には北の革命の論理と行動展開がある。それがここでの核心であろう。このようにして、「殺」「劔」「アジア主義」などに表徴される「右」の要素が存在するにせよ、北を一義的にファシストしたがってそのイデオロギーをファシズムと捉える見方は妥当しないと思われる。

#### IV. 「魔王」ないし「呪的存在」としての北一輝

これまでの叙述でも一端が窺われるように、北とは一種異様な存在である。その風貌、その行動、その情緒、その思索あるいはイデオロギー、その文体・表現様式など、いずれの側面をとっても北一輝という存在には、なにか非日常的なもの、デモーニッシュなもの、鋭く危険で・しかも美しいものがつきまとっている。それが、よく指摘される北の「魔王」的な、「カリスマ」的な性格にほかならない。以下、いわば彼の深層を形成するものとしての「魔王」ないしは「呪的存在」の観点を中心に論を進めよう。

最初に、「魔王」命名の由来を探ってみる。それは必ずしも明確に探知できないが、まずは、北にとって「日本が革命になる、支那よりも危ないから帰国しろとワザワザ上海にまで迎えに来た大道念に刎頸の契りを結んだ<sup>(57)</sup>」大川周明によって示される。すなわち、大川は北との活動と別離を回顧する「北一輝君を憶ふ」の一文において、「離別の理由は簡単明瞭である。それは当時の私が北君の体得していた宗教的境地に到達して居なかったからである。当時私が北君を「魔王」と呼んだのに対し、北君は私を「須佐之男」と名づけた。……北君自身は……名前は魔王でも実は仏魔一如の天地を融通無礙に往来した<sup>(58)</sup>」。ちなみに、北・大川・満川の「三尊」を中心とする猶存社が解散したのは1923年のことである。

さらに鮮明なのは、北の実弟・北吟吉による『兄北一輝を語る』での一節である。やや長くなるが下記に引用する。「兄には良くいへば靈感があり、悪くいへば憑拠的性格である。……常に予言めいたことをいふので、兄に接近する人々は“魔王”と称している。兄がどうして霊感的な人格になったかといへば、既に幼少の時から、その萌芽があった。……この変態心理的傾向は、永年の眼病の為め、コカインか何かに影響されたのではないかと思ふ。……永福という行者に接してからではないかと思ふ。……兄の霊力は異常である。……さるにても、兄が昭和4年より今日に至るまでの日々の霊感的予言書は、未だ何人にも公開されないが、何時の世に光を見るであらうか、絵より詩へ、… (ママ) より恋へ、支那より日本へ、現世より霊界へ一数奇なる、また華麗なる天路歷程よ<sup>(59)</sup>」。もう一つ、同じく北吟吉の「風雲児・北一輝」のなか

で、「問題の書“日本改造法案大綱”は大正8年上海に於いて、十数日の断食を続け、法華經三味の境で三四十日で書き上げたものである。神憑かりの状態で書いたことは争はれない。……三十七歳の若者の作としては文章も老成し、一種の威厳があって鬼気人に迫るものがある<sup>(60)</sup>」としている。

これらは、北一輝における、いわば原初的あるいは固着的な「魔」ないしは「霊」の存在を証言するものであるが、それを対人的あるいは政治的な次元での「支配」資質で表現すれば、いうまでもなく「カリスマ (charisma。ギリシア語。神の賜物の意)」にほかならない。この点について、橋川文三から若干引用してみる。

さきあげた大川周明による北一輝の「魔王」的な人格把握、すなわち「尋常人間界の縄墨を超越して仏魔一如の世界を融通無礙に往来」した人物に対しては、その超人的カリスマに服従してその帰依者になるか、あるいはそれから逃避するかである。そこで橋川は指摘する。すなわち、「北におけるカリスマの性格はウエーバーの規定をそのままに思わせるものがあつた。“カリスマ的支配は、支配者の人 (person) と、この人のもつ天与の資質 (charisma)、とりわけ呪術的能力、啓示や英雄性、精神や弁説の力、とに対する情緒的帰依によって成立する。永遠に新たなるもの、非日常的なるもの、未曾有なるもの、これらによって情緒的に魅了されること、この場合、個人的 (personlich) 帰依の源泉なのである”<sup>(61)</sup>」。

北一輝は、なぜ誘蛾灯のように作家たちの執筆意欲を刺激して多彩な「文学」に登場してきたのか、なぜ今日に至るまで政治学や社会学の上での広汎な論説・考究の対象であり続けたのか、なぜ明治・大正・昭和の時代を通貫する危険で・魅力的なイデオログとしての地歩を保ってきたのか、その基底はここに示唆されているかにみえる。その「魔王」性、その「呪的」な特質、その情緒的・個人的な「帰依」の対象となる「カリスマ」性—それが「基底」であるように思われる。多くの人々はまさに北一輝という「異様な存在」が放射する天与の・非日常的なカリスマに魅了されてきたのではなからうか。

さて、このような「呪性」の発端を探ることは極めて難しいが、あえて憶測すれば三つの契機が考えられる。一つは先述した幼少期からの眼疾で、これについては前記の実弟・北吟吉の指摘がある。二つはこれも前述した佐渡の恋人・松永輝との若き日の引き裂かれた愛である。三つは同じく青少年時代の佐渡の新聞論壇での彼の「国体論」に関わる非難の奔出いわゆる「不敬事件」の体験である<sup>(62)</sup>。これら身体機能・情感・論理のそれぞれの次元におけるほぼ同時的でシリアスな挫折感・喪失感の累積複合は（眼疾における“失明”、輝との“失恋”、議論における“失意”）、若き北一輝における深刻な一種の怨念を形成したのではないか。そして怨念は「呪」を誘発し、「呪」への能動的な傾斜は自らを「魔ないし魔王」へと突き動かす強いモメ

ントである。やや蛇足ではあるが、ここで私は“能動的ニヒリズム”としてのファシズムあるいはナチズムの一つの重要な行動帰結としての“悪魔的な行為”を想起せざるを得ない。

以下、このような「魔的」ないし「呪的」な状況を、できるだけ北自身の叙述を踏まえて概観してみよう。よく指摘されることだが、それはまず、支那革命の際の盟友・宋教仁や日本の駐支公使・山座圓次郎などの怪死についての北の幻想としてあらわれる。

はじめに、宋教仁の暗殺をめぐってである。

1913年3月20日の夜、当時、自他共に革命支那の次期内閣総理と認められていた宋は袁世凱の招請に応じて北京に向かうべく上海北駅にいたが、何者かによって狙撃され、22日に死んだ<sup>(63)</sup>。この状況を嘆じて北は述懐する。すなわち「遮莫（さもあらばあれ）、第二革命の因を為せる故宋教仁の横死は誠に悼むべく憤るべきものなりき。あゝ天人俱に許さざるの此大悪業よ。亡霊の浮かぶべからざる怨として遺友三年胸奥に包みたる此大秘密よ。袁は主犯に非らず一個の従犯なり。暗殺計画の主謀者は彼と共に轡を列べて革命に従ひし陳其美にして、更に一人の従犯は驚く勿れ世人の最も敬すべしとせる孫逸仙（原文ではこの3字は伏せ字だが孫逸仙＝孫文とあるのがほぼ確実。井上注記）なるぞ。……現世明らかに見たる畜生道の巷よ。……亡霊一夜まざまざと枕頭に起ちし翌の日、不肖は秘密の所在を発見したり。……而して思いは廻りて幻の如く枕頭に立ちし亡霊の不可思議に返りつゝ<sup>(64)</sup>」。ここでの私の関心事は、宋教仁暗殺の真相にあるのではない。北一輝の左の真眼と右の義眼とが錯綜しつつ「まざまざと」凝視した盟友・宋の亡霊の幻影、それは北によって凝視された支那革命ひいては日本の革命の、夢想と挫折の幻影と重なり合う。彼の「魔」あるいは「霊」の素性は何か暗鬱なマイナスの色で彩られていたように思えてならない。

ついで、山座公使と水野参事官の怪死をめぐってである。この問題に関わる北自身の異様な認識を以下に瞥見する。まず、「支那革命外史序」における叙述を引用しよう。「支那公使山座圓次郎氏と同参事官水野幸吉氏の遺影を書中に挟んで置いた理由については不肖自身の語るべき限りの者でない。歴史は沈黙のままに流れて居ればよろしい。あるいは天、選ばれた者の手を借りて歴史の唇を引裂く日もあろう。あゝ黒い血潮を吐いて前後任地に仆れた公等の道義的対支策を継承すべき第二の公等は今何処にあるのだ。……今日、終に時機到来した日英間の訣別は公等の死を以って購い得たのであるか<sup>(65)</sup>」。

更に彼は述べる。「あゝ山座公使。……大秘密の死に弊はれたる公及水野参事官の綿々たる恨は高祖皇宗の知るあり。……三年の長き、日本は公等の恨みを知らずして却って英国に隷従し……莊嚴なる犠牲よ。……上下呆顔喪心して一つの相模太郎を見ざる時、不肖等は終に公等の遺志を支那の動乱に見ざるを得ず。……驚才不肖の如くにして尚公等の恨を三世諸佛に祈りて止まず<sup>(66)</sup>」。この事件の真否もあまり定かではない。実弟・北吟吉によれば「本書『支那革命

外史』 井上) の内に、山座公使と水野参事官が袁の為に毒殺された如く暗示してある。之は何等外的な証拠もなく、一般に無稽の言と認められるが、兄は真面目に之を信じている。之は兄の神秘的性質に依るのである。……山座、水野の変死論も、兄の靈感によって生じたことは疑われない<sup>(67)</sup>。ここにも、異常な死を凝視する北の異常な眼差しの存在を否定できないであろう。だが、その眼差しは、まったくの空虚な幻影に向けられているのではない。彼にとって、あり得べき支那革命の理想、それに関連する日本の支那革命への望ましい参画、それら北の希求する実体の挫折への怨念の結晶は「黒い血潮」を吐くような幻影・呪的世界のイメージを形成したに違いない。それが、この段階における北一輝の「魔」的、「呪」的世界の内実であったのではないか。もしかしたら、彼はA. ランボーやG. ネルヴァルのような「幻視者(visionnaire)」であったのではなからうか。ちなみに、辞書によれば visionnaire には、「夢想的改革者」「幻影を見る人、未来の予見者」「妄想家、見神者」の意もある。これは、これまでに見てきた北一輝のイメージと、ほとんど重なり合うではないか。このようにして、「魔王」あるいは「呪的存在」としての北の肖像は、彼の内面の本質につながるものである。

また、「魔的」ないし「呪的」な状況をより直接に示すのは、これもよく指摘されることだが、いわゆる『霊告日記』であろう。それは如何なる日記か。それを語る二つの説明をあげる。まず、「北日記」は、昭和4年4月27日から昭和11年2月28日までの期間にわたって書かれた、北一輝の日記であるが、言葉の通常の意味における日記とは趣きを異にする態のものである。……多くは、北や北夫人、大輝(支那革命の同志譚人鳳の孫で北の養子 井上)の見た夢、北夫人の霊告、神社仏閣参拝についての記述である<sup>(68)</sup>。別に、「霊告日記」は昭和4年4月27日から書き始められ、2.26事件が勃発して北が逮捕される直前の昭和11年2月28日まで、ほぼ毎日書きつけられた。内容のほとんどは、すず子(北夫人 井上)を介して北に告げられた神社・神霊のお告げやヴィジョンで、ほかに若干の夢(すず子の夢と北の夢がある)の記述があるが、通常の日記に記されるような日々の雑録などは、いっさい含まれていない。日記と呼ばれてはいるが、内容は純然たる霊界との交流記録である。……“霊告日記”は全部で6冊ある。……北の意識のなかでは、この不思議な記録は、神仏ないし天からもたらされた“言”(ことば、神託)、あるいは“啓”(さとし、啓示)の集録なのである<sup>(69)</sup>。

ここでは『日記』の内容自体にはあまり立ち入らないが、上記の宮本あるいは藤巻の著作に依拠して、ごく一部分のみを例示する。その一つは『改造法案大綱』への自負を示すもので、「ヤヨ神仏大観シ、汝ヲ護ル国家法案、国家安泰ヲ計レ(昭和8.1.12)」「汝の国家法案、是れ光なり(同1.29)」などである(藤巻p231)。その二つは自身の不安や恐怖感に関わるもので、「今着テ居ル支那服ズタズタニ斬ラレ居ル余(10.2.8)」、「瘦セ衰ヘタル婦人余ノ頸ニ取りツキ

余ト共ニ新ラシキ桶風呂ニ入ル。顔ヲ見ントスルニ胸マデ見ユ、手足ノ細キ、余恐ロシサニ不堪、合掌唱名スルニ手ニ触ルル其ノ指ノ細キ又更ニ恐ロシ。十二時過。ウツツノ如ク何人カト思ウニ妻ノ身代ハリトナレル狂夫人ト感ズ。悲シ (10.8.13)」などである (宮本 p46、p54)。なお、「新ラシキ桶風呂」とは「新しい棺桶」の暗喩であって、死の意識はこの当時の北に大きく接近しているかに見える。その三つは2.26事件に直接に関与するものである。まず、事件の参画者の一人である村中孝次の蹶起の意思に答える形で「大内山光射ス、暗雲ナシ (11.2.24)」とし、また事件直後に村中・磯部に伝えた「2.26、夜半一時半、寢室ニ入り眠ラントスル前ニ、革命軍正義軍ノ文字並ヒ現ハレ革命軍ノ上ニ二本棒ヲ引キ消シ ~~革命軍~~ 正義軍 ト示サル。人無シ勇将真崎在リ 国家正義軍ノ為メ号令シ正義軍速ニ一任セヨ (11.2.27)」などがある (宮本 p62)。「大内山」とは皇居の意味で、そこに「光りが射す」とは蹶起の正当性あるいは成功の可能性を示唆している (これも結果的には悲劇的な幻想ではないか)。

このように北及び北夫人は、あたかも「自らをトランス状態に導き、神・精霊・死者などと直接に交渉し、その力を借りて託宣・予言・治病などを行う宗教的職能者」としてのシャーマン (『広辞苑』) 的な存在でもある。そのような一種の「靈力」「魔性」獲得の経緯もこの『日記』から発見できる。すなわち、「秘密神通力仏智眼力あり 努力せよ (5.3.1)」、「一面ニ照リ輝ク光ノ中ニ 日蓮 我汝ト共ニ此処ニ住ス 光ソノママノ中ニ諸神諸仏神通力 (5.5.8)」 (宮本 p182~183)、さらに「汝に通力授く。大魔ともなれ、或ハ観音心ともなれ (6.10.24)」 (藤巻 p178) などである。また、上の例示からもうかがわれるように、この『霊告日記』に記述されている多くの部分は北の存在・行動・思想などに関わるいわばポジティブな靈的自己認識であるが、その反面、わずかとはいへ上記のような不安・恐怖感などネガティブなものも無視できない。「両義性」「二律背反性」はここにもうかがわれるといえよう。

さて、「魔性」ないし「呪性」の始発的な契機の想定については先述したが、その「魔性」「呪性」を彼の内部に深化させ・固着させたものとして、上にも示されるように独特の「日蓮」あるいは「法華経」信仰を逸することができない。いうまでもなく、北の生誕と成長の地・佐渡は順徳天皇や世阿弥、そして日蓮などの流刑の地であるが、彼の「日蓮」「法華経」信仰への重要な転機の時は大正4~5年 (1915~1916年) とみられる。『支那革命外史』の前半 (8章まで) は大正4年、後半は同5年に執筆・頒布されているが、この時期は北の精神生活史の上で重要であった。やや長い引用だが、藤巻によれば「北が、大正5年という年を特別の年と見なし、同年1月以後の生活を“見仏の生活”と呼ぶようになったのは、その時から彼の『法華経』信仰に魂が入り、じかに神仏と触れ合う信仰になったという意味にほかならない。大正5年1月は、北が“輝次郎”から“一輝”と改名した記念すべき月でもある。“大正5年1月より一輝と

称し其後は法華經を信仰し之を読み実行することが自分の使命なりと信ずる様になりました”。宮内庁怪文書事件の尋問調書で、北はこう述べている。……この名は“北で一番に輝く星—北極星”を暗示している。……日蓮宗でも、北極星は北辰妙見菩薩として崇められており……北が新たな号とした“一輝”は、この“北辰妙見大菩薩”のことであり、天子そのものの星を意味している。法華行者として生まれ変わった北の高揚した気分が、この号からひしひしと伝わってくる<sup>(70)</sup>”ということである。なお、このように「一輝」が「北極星」「北辰妙見大菩薩」ひいては「天皇」を含意しているとするならば、北一輝という人物の天皇への複雑で独特な一種の「憎悪愛」は、極めて根の深いものといわざるを得ないであろう。もしかしたら、この天皇感ないし天皇観が北の「魔性」「呪性」の根源的な暗部に存在していたかもしれない。

では、このような日蓮ないし法華經への深い傾倒の一端は、彼の主要著作のうちにとどのように出されているか、以下に若干探してみる。

まず、『支那革命外史』の「序」で「經文に大地震裂して地湧の菩薩の出現することを云ふ。大地震裂とは過ぐる世界大戦の如き、来りつつある世界革命の如き是れである。地湧菩薩とは地下層に埋るゝ救主の群といふこと、則ち草澤の英雄下層階級の義傑偉人の義である。一支那は十年前の十月十日、清末革命の本義を徹底せんが為めに禹域四百州の大地今將に震裂せんとして居る。露西亞の大地震裂に際して地湧の菩薩等は不動尊の劔を揮ひ不動尊の火を放った<sup>(71)</sup>」。「地湧の菩薩」とは何か。それは法華經の「從地湧出品」に出典し、「釈尊の滅後にこの經を護持し、読誦し、弘通し、大地を割って湧出」する仏たちであって、「世界の変革期にあらわれてきて、法華革命に取り組む“革命仏”なのである<sup>(72)</sup>」。

ここには、自らを「地湧の菩薩」に擬する北の風貌が明瞭に浮かびあがってくるが、それは『外史』の最終部分「二十 英独の元寇襲来」の末尾において、さらに鮮明に・さらに「呪性」を濃厚にして示される。すなわち、「世界列強の興亡に最後の判決を与ふる大にして正なる“大正日本”たるか。英独の元寇襲来によりて消失すべき亡国史を書くか。一に支那革命の神風を賜ひし天寵を拝謝して外交革命を断行することに在り。不肖何をか隠さん亦妙法蓮華經の一使徒。教兄日蓮慈悲折伏のコーランを説きて未だ刃を出さず。……支那革命の犠牲—宋教仁君及び范鴻仙君。日本外交革命の犠牲—山座公使及び水野書記官。あゝ日支両国を救はんとして三年の先に今日の囚を緋きし護国の神神よ。佛光東亜を照らさんと欲せば希くは公等の怨に燃ゆるものゝ魔血に我が經卷を浸さしめよ。……妙法蓮華經に非ずんば支那は永遠の暗黒なり。印度終に独立せず。日本亦滅亡せん。国家の正邪を賞罰する者は妙法蓮華經八巻なり<sup>(73)</sup>」と。とりわけ、「コーランを説きて未だ刃を出さず」や「怨に燃ゆるものゝ魔血に」などの叙述むしろ呪言ともいふべきものは、まるで小説やドラマの中の、おどろおどろしい秘密の調伏の光景のようである。

法華經への傾倒をより直接的に語るものは処刑前の昭和12年8月18日、大輝に宛てた北の遺書であろう。その一部を引用すると、「大輝ヨ。此ノ經典ハ汝ノ知ル如ク、父ノ刑死スル迄誦読セル者ナリ。汝ノ生ルルト符節ヲ合スル如ク突然トシテ父ハ靈魂ヲ見神仏ヲ見此ノ法華經ヲ誦読スルニ至レルナリ。則チ汝ノ生ルハトヨリ父ノ臨終マデ誦読セラレタル至重至尊ノ經典ナリ。父ハ只此ノ法華經ヲノミ汝ニ残ス<sup>(74)</sup>」。ちなみに、北大輝の誕生は大正4年11月であって、前述の「法華經」信仰への転機の時期と符合する。

また、やや特異な逸話であるが、北の「魔的」な魅力への一種「呪的」な憑依の挿話をあげる。それは、昭和テロリストの代表人物の一人である朝日平吾（佐賀県出身、大正10年9月、安田善次郎を刺殺してその場で自死）の甥の辻田虎之助の手記であって、「太平洋戦争が、形勢が悪くなった昭和18年のある日、九州在住の私達4人は集まって、2.26事件後北一輝の奥さんから分骨していただいた、北一輝、西田税の遺骨の入っている骨壺をとり出した。そして、北先生がいれば、あるいは太平洋戦争も起らなかったし、戦争もこんな悲惨にならなかったろう。北先生がいればと思ひながら、この骨壺を開けた。北先生のは白く、西田氏のは薄茶色の骨であった。そして泣きながらこの骨を4人でかじり、たべてしまった<sup>(75)</sup>」。ほとんど中世西欧のサバトやオカルトの世界を彷彿とさせるようなこの情景は、北一輝という存在の非日常的なカリスマ性、デモニーシユ性、「魔王性」、「被憑依性」を鮮明に描いているように思われる。

このように、「魔王」ないし「呪的存在」としての北一輝は、いつも鋭く危険でしかも（だからこそ？）人を魅するものを持っている。これまでに述べたように、おそらくその初発的な契機は幼少期から青少年期にかけての執拗な眼疾、松永輝との失愛、「国体論」に関わる「不敬事件」などの累積複合であり、それを深化させ固着させたものとしては「日蓮」ないし「法華經」信仰であろう。

さらにまた、それらに通底するとみられる北のいわば「内的資質」ともいうべきものに立ち入ってみよう。ある犀利な指摘によって、私はそれをいわば「発見」したのである。その指摘とは次のようなものであった。下記に引用する。

「北が北の“社会民主主義”をひとたび構想し、後に彼の“靈的生活”を持った理由、これらの表象に共通で根本的な動因であり、北が一つの存在形態から他のそれへと移行することを支え、促した存在は何か。最初にわれわれはこの動因について知るために少しく病蹟学的な（パトグラフィッシュ）手法を藉りて、北の心の中に顕著に存在する両義性（アンビヴァレンツ）を指摘することから始める。それは、通常人の多かれ少なかれ持つ両義性より何層倍か強いものであった。内面志向と外面志向の併存である。……それは北の内なる二つの存在そのものなのである。そして、この両義性が内なるものであるが故に北は常にその両立と架橋を求めべく衝

迫され続けていた。……自己の内なる“外”と自己とを統合すべく責められている状況に対する回答が、論理として表出される時、産出されるものは言うまでもなく変革の思想となる。……また、このような回答が非論理において表出される場合はどうなるか。……北という人格そのものが実存を生きることである。彼の“霊的生活”はかれの実存である<sup>(76)</sup>。尖鋭なメスによって北の内面の深部を抉り取るようなこの指摘の核心は、これまでに述べた彼の「魔性」ないし「呪性」の内的な根源は北の内部に固着した「両義性」「二律背反性」にあるということであろう。

ここにおいて、この小論における北一輝の「両義性」「二律背反性」に触れたこれまでの私の叙述の一部を振り返らざるを得ない。それらは、「右翼とも左翼ともつかぬ」独自の存在（「“文学”に登場する北一輝」）、三島由紀夫の『英霊の声』における北の天皇観ないし天皇感の二律背反性（同上）、「文学者ないし文学者的気質」を有する人たちによる北への愛着と反発すなわち「二律背反の対象としての北の存在」（「“詩人”としての北一輝」）、「ファシストの源流」であることとそれへの反措定の可能性（「“イデオログ”としての北一輝」）などである。そして、それらの象徴的な集約が右の義眼と左の真眼との確執であった。北の深い内部への本質的な潜行の試みにおいて、私のこれまでのアプローチは、ここで竹山の的確な指摘と重なり合い、「私論」すなわち「私にとっての」北一輝論を終える。

## 注

- (1) 北一輝 [1967/1] p5
- (2) 同上書 p6
- (3) 武田泰淳 [1963/7] p282～289 が三島由紀夫の解説部分
- (4) 北一輝 [1967/1] p156
- (5) 田中惣五郎 [1949/10]。なお、これと同一の写真が松本健一 [2004/1] の巻頭にもある。松本によればそれは「2.26 事件直後、警視庁に出頭したとき（53 歳）」である。また、松本 [2004/6] の巻頭写真は「昭和 11 年 2 月 28 日、憲兵隊に連行された際の撮影と思われる」ものだが、これも支那服を纏っている
- (6) 北一輝 [1967/1]
- (7) 松本健一 [2004/9] p264～269
- (8) 同上書 p135～136
- (9) 2.26 事件に連座して死刑した北一輝は、獄中で、若き天皇裕仁（当時数え 36 歳で北の 18 歳下）に軍隊を掌握されてしまったという意味で、「若殿に兜とられて負け戦」と詠んだ。同上書 p122
- (10) 竹内好 [2004/5] p415～416
- (11) 三島由紀夫 [1970/8] p217
- (12) 同上書 p232
- (13) この三島による北の天皇観の指摘は、北自身の『国体論及び純正社会主義』に依拠している。例えば、「国体論中の“天皇”は迷信の捏造による土偶にして天皇にあらず。…土人部落の土偶はたとえ社会主義の前面に敵として横たわるとも又陣營の後へに転がり来るとも、社会主義の世界と運動とは

- 不要にして天皇は外に在り。…実に日本の国体は数千年間同一には非らず、日本の天皇は古今不変のものにあらざるなり」。北一輝 [1967/3] p210、p218
- (14) 三島由紀夫 [1970/8] p226
- (15) 同 [1969/2] p183
- (16、17) 同『奔馬 豊穰の海 (2)』、新潮文庫版 26 刷 [1990/8] p448
- (18) 松本健一 [2004/9] p252～253
- (19) このエッセイの初出は新潮社刊『三島由紀夫全集 第 34 巻』(昭和 51 年 2 月)。ここでは手許の三島『アポロの杯』新潮文庫版 [1990/12] p226～234 による
- (20) 久世光彦 [2003/3] p305
- (21) 同上書 p299
- (22) 田中惣五郎 [1949/10] p11、13、18、19
- (23) 山中峯太郎 [1976/9] p7
- (24) 北一輝 [1967/1] p3
- (25) 松本健一 [2004/9] p196～198
- (26) 北一輝 [1967/3] p101
- (27) 田中惣五郎 [1949/10] p16
- (28) 松本健一 [1971/3] p290 以下
- (29) 三好達治選 [2003/4] p409 の『郷土望景詩』の中の「波宜亭」の一節
- (30) 村上一郎 [1970/5] p59
- (31) 北一輝 [1967/1] p35～36、以下の引用はさしあたり同書による
- (32) 橋川文三 [1964/11] p168～184 に所収の磯部浅一『2.26 事件獄中録』
- (33) 橋川文三・同上書 p283～347 において、橋川による北の『日本改造法案大綱』解説の前書きで「あまりにも有名な日本ファシズムの聖典」とある
- (34) 北一輝 [1967/1] p3～9
- (35) 同上書 p213。また、満川亀太郎は大川周明、北一輝等と共に大正 8 年に猶存社を創立した人物。当時、この 3 人は猶存社の「3 尊」とよばれた
- (36) 同上書 p356、『日本改造法案大綱及び補遺』冒頭における北執筆の「第 3 回の公刊頒布に際して告ぐ」(大正 15 年 1 月)での叙述
- (37) 同上書 p220『国家改造案原理大綱』
- (38) 三島由紀夫 [1990/12] p231
- (39) 北一輝 [1967/1] p288
- (40) 同上書 p355～361。西田税版に付された「第 3 回の公刊頒布に際して告ぐ」。この項での以下の引用も同じ
- (41) 同上書 p5、『支那革命外史』の「序文」
- (42) 同上書 p223、『国家改造案原理大綱』の「巻一」
- (43) 北一輝 [1967/3] p357、『国体論及び純正社会主義』の第 4 篇
- (44) 同上書 p2、「緒言」
- (45) 北一輝 [1967/1] p360、「第 3 回の公刊頒布に際して告ぐ」
- (46) 同上書 p220
- (47) 同上書 p270
- (48) 安部博純 [1995/6] p341。もっとも、安部は「北一輝ほど多面的評価を受ける人物も珍しい。…北の評価については、大ざっぱに分けて二つの傾向がある。一つは彼をファシストとして捉える立場であり、いま一つは彼を単純にファシストだと決めつけることに批判的な立場である」と、一定の留保はしている。ちなみに、本稿の立場はもちろん後者である
- (49) 丸山真男 [1957/4 上巻] p36～52、第 1 部「現代日本政治の精神状況」「二 日本ファシズムの思想と行動」「3 そのイデオロギーにおける特質」より。なお、上記の安部の著書ではウルトラ・ナショナリズム＝ファシズムのイデオロギー面の特質として、以下の諸点をあげている。①生ける有機的生命体としての民族ないしは国家の聖化②自民族至上主義ないしは自民族優越主義(その裏返しとして

の他民族の敵視ないしは蔑視) ③ファナティックな民族的使命感(とくに「世界史的使命」の高唱)  
④広民族主義(民族自体の拡大)あるいは生存権ないしは支配権の主張⑤そして以上の理念を実現する手段としての武力の崇拜、侵略の正当化等(安部、同上書p347)。だが、これらの「特質」は上の丸山の古典的規定と重なるものが多く、また北の『大綱』を最初から超国家主義=日本ファシズムの「経典」として捉え、その演繹的な結果としてこれらの「特質」を導出している感が強い

- (50) 北一輝 [1967/1] p223
- (51) 丸山真男 [1957/4 上巻] p43
- (52) 橋川文三 [1964/11] p38
- (53) 北一輝 [1967/3] p256~257
- (54) 同上書 p393
- (55) 同上書 p418
- (56) 同上書 p15
- (57) 北一輝 [1967/1] p4、『支那革命外史』の「序文」
- (58) 松本健一 [2004/10] p277
- (59) 宮本盛太郎 [1976/8] p248~253。なお原著「兄 北一輝を語る」は当初『中央公論』昭和11年7月号に掲載
- (60) 同上書 p264~265。「風雲児・北一輝」は当初『文芸春秋』(臨時増刊号)昭和30年6月号に掲載
- (61) 橋川文三 [1964/11] p35。橋川執筆の「昭和超国家主義」の「六 北一輝の場合」。なお引用符の部分はウエーバーの表現した規定
- (62) 松本健一 [2004/9] 巻末の「北一輝年譜」によると、眼疾に関しては8歳の時に初発して眼科にかかり1年以上休学、16歳に再発して新潟の病院で1カ月入院。17歳の時、木の枝に触れて眼病再発、7カ月入院。19歳東京より一時帰郷したが右眼失明。また失恋に関して、17歳の時に恋人松永テルとの交際を断られる? さらに論壇登場の失意に関して、20歳の時に『佐渡新聞』に発表した論文「国民対皇室の歴史的観察」が不敬という理由で連載2日で中止、21歳の時、上記国体論批判の不敬事件が再発。この後、同年の夏に故郷から上京、『国体論及び純正社会主義』の執筆に没頭
- (63) 松本健一 [2004/3] p155~156
- (64) 北一輝 [1967/1] p138~140
- (65) 同上書 p7
- (66) 同上書 p175
- (67) 宮本盛太郎 [1976/8] p248
- (68) 同上書 p2、「北日記」について」
- (69) 藤巻一保 [2005/4] p100
- (70) 同上書 p76~77。なお、『広辞苑』によれば、「北辰。(北天の星辰の意)北極星。また北斗七星のこと。帝居または天子のたとえ」
- (71) 北一輝 [1967/1] p8
- (72) 藤巻一保 [2005/4] p94
- (73) 北一輝 [1967/1] p203~204
- (74) 松本健一 [2004/9] p139~140
- (75) 同上書 p120~121、p201
- (76) 宮本盛太郎 [1976/8] p74~75。竹山護夫の論文「北一輝の生存空間の転換」

## 参考文献

(以下は、手許に所蔵するものに限定。発行年次は西暦に統一。配列は著者名アイウエオ順)

### <北一輝自身の著作>

『北一輝著作集 第1巻』みすず書房、1967年3月、第3刷

『北一輝著作集 第2巻』同上、1967年1月、第2刷

北一輝『支那革命外史抄』中公文庫、2001年8月、初版

### <小論に引用の北一輝に関わる「文学」作品等>

久世光彦『陛下』新潮社、1996年1月／同左 中公文庫、2003年3月

武田泰淳『風媒花』新潮文庫、1963年7月

利根川裕『宴』中公文庫、1980年2月

手塚治虫『一輝まんだら 上・下巻』角川書店、1990年12月

三島由紀夫『英霊の声』河出書房新社、1970年8月

同上『豊穰の海 第2巻奔馬』新潮社、1969年2月

山田正紀『マジック・オペラ 2.26殺人事件』早川書房、2005年11月

山中峯太郎『大東の鉄人』講談社、少年倶楽部文庫、1976年9月

### <北一輝に関する直接的な文献>

岡本幸治『北一輝 転換期の思想構造』ミネルヴァ書房、1996年1月

川合貞吉『北一輝』新人物往来社、1972年12月

G.M. ウイルソン／岡本幸治訳『北一輝と日本の近代』勁草書房、1971年12月

竹内好『日本とアジア』中の「北一輝」、ちくま学芸文庫、2004年5月

田中惣五郎『日本ファシズムの源流 北一輝の思想と生涯』白揚社、1949年10月

同上『増補版北一輝 日本のファシストの象徴』三一書房、1971年1月

豊田穰『革命家北一輝』講談社文庫、1996年6月

長谷川義記『北一輝』紀伊国屋新書、1969年9月

藤巻一保『魔王と呼ばれた男 北一輝』柏書房、2005年4月

松本健一『評伝北一輝 I 若き北一輝』岩波書店、2004年1月

同上『評伝北一輝 II 明治国体論に抗して』同上、2004年2月

同上『評伝北一輝 III 中国ナショナリズムのただなかへ』同上、2004年3月

同上『評伝北一輝 IV 2.26事件へ』同上、2004年6月

同上『評伝北一輝 V北一輝伝説』同上、2004年9月  
同上『若き北一輝 恋と詩歌と革命と』現代評論社、1971年3月  
同上『北一輝論』同上、1972年3月  
同上『北一輝論』講談社学術文庫、1996年2月  
松本清張『北一輝論』講談社、1976年2月  
三島由紀夫『アポロの杯』新潮文庫、1990年12月所収、  
「北一輝論 “日本改造法案大綱”を中心として」  
宮本盛太郎『北一輝の人間像 「北日記」を中心に』有斐閣選書、1976年8月  
村上一郎『北一輝論』三一書房、1970年5月

<その他の関連文献>

安部博純『新装版 日本ファシズム研究序説』未来社、1995年6月  
大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、1993年4月  
大塚健洋『大川周明』中公新書、1995年12月  
かわぐち・かいじ『日本暗殺史 テロルの系譜』ちくま文庫、2002年7月  
木下半治『日本国家主義運動史 I、II』福村出版、1971年9月  
滝沢誠『権藤成郷』紀伊国屋新書、1971年9月  
竹内好 編集解説『アジア主義』現代日本思想大系9、筑摩書房、1963年8月  
堂本正樹『回想 回転扉の三島由紀夫』文春新書、2005年11月  
橋川文三『ナショナリズム その神話と論理』紀伊国屋書店、2005年3月  
同上 編集解説『超国家主義』現代日本思想大系31、筑摩書房、1964年11月  
松本健一『大川周明』岩波現代文庫、2004年10月  
同上『竹内好論』岩波現代文庫、2005年6月  
丸山真男『現代政治の思想と行動 上・下巻』未来社、1957年4月  
三島由紀夫『文化防衛論』新潮社、1969年4月所収、  
「道義的革命的論理 磯部一等主計の遺稿について」  
三好達治選『萩原朔太郎詩集』岩波文庫、2003年4月  
吉本隆明 編集解説『ナショナリズム』現代日本思想大系4、1964年6月

### 〈編集後記〉

井上参与の論稿は、北一輝の複雑な思考と歴史的役割に迫るものです。北一輝という人物は、学校の授業で「右翼」と教えられたかすかな記憶があります。この論稿を読んで、そうした理解がいかに浅いものだったか気づきました。人は自分の専門から遠いものの区別はつけられないといえます。しかしその分野の専門家に聞いてみれば、素人目には同じにうつるものが、実は異なっていることがわかるでしょう。本稿は、文学作品や日記などの資料を丹念に分析して、右翼や左翼といった粗雑なラベルを超越する北一輝の人物像を明らかにする、興味深い研究です。

(M. A.)

---

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 柴田弘捷

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561

---